活動年鑑８

2012 年 6 月～2013 年 5 月

公益社団法人日本技術士会
青年技術士交流実行委員会

目次

2012 年度　青年技術士交流実行委員会活動報告　2
例会 G 活動報告　4
ITG 活動報告　6
活動報告書　7
A) 例会・テクノツーリズム
2012/6/16　6 月例会：地域本部交流会
2012/6/17　統括本部＆地域本部交流会（テクノツーリズム）
2012/8/5　8 月例会：ビアパーティ
2012/9/2　トヨタテクノミュージアム産業技術記念館 ガイドツアー
（中部・北陸・統括本部合同テクノツーリズム）
2012/9/23　第 39 回　技術士全国大会　青年のつどい及び交流会
2012/10/27　10 月例会：日本電鍍工業見学会
2012/11/24　11 月例会：スマートフォン例会
2012/12/9　テクノツーリズム講演会
2013/1/19　1 月例会 : 青年技術士実行委員会活動中間報告会及び国際交流活動報告会
2013/1/26　平成 24 年度技術士第一次試験合格者・JABEE 修了見込者ガイダンス
2013/2/16　2 月例会 :「コミュニケーション力のアップを目指して、
コーチングを体験しよう」
2013/3/16　テクノツーリズム：地質と日本酒の関係
2013/3/23　3 月例会：ディベートを体験しよう！
2013/4/27　特別例会：青年技術士展 2013 一次・二次試験合格者交流会

B) サッカー・フットサル交流
2012/5/12　フットサル練習会
2012/7/15　フットサル練習会
2012/9/1　サッカー合同練習会
2012/12/8　サッカー合同練習会
2013/2/9　サッカー練習会

C) 国際交流活動
YEAFEO19 派遣報告

委員名簿　68

2012 年度　青年技術士交流実行委員会活動報告

本委員会は、研修委員会の下部組織であり、各部会から推薦された委員および、当委員会により推薦された委員補佐により構成されています。委員は各地域本部より推薦された地域本部委員も含みます。本会運営への青年層の参画および国内外を問わず技術者間の“交流”を通しての研鑽を実施しています。

2012 年度の主な活動を下記にまとめます。

1-1. 特別例会

2012 年 4 月 28 日、青年技術士交流実行委員会主催『1・2次試験合格歓迎会および青年技術士展』では各部会からの参加者による活動紹介の機会を設けると伴に、技術士の交流についてテーマとしたディスカッションを参加者全員で行いました。続いて開催された合格者交流会へは、部会参列者も含めて 70 名超の参加を頂きました。

1-2. 若手技術者の国際交流活動

2012 年 10 月 17 日～19 日に名古屋市で開催された日韓技術士会議の本会議および分科会、サッカー親善試合に参加しました。

2012 年 12 月 16 日～19 日にカンボジアで開催された ASEAN 技術者協会連合『YEAFEO19』への参加の支援をしました。3 名の会員・準会員を派遣し、2013 年 1 月 13 日の国際交流活動講演会で『YEAFEO19』の参加報告および派遣者による講演会を行いました。合わせて同日に中間報告会も開催することで、参加者に対する青年委員会活動の訴求を図りました。

1-3. 若手技術者向け研鑽事業

講演会・勉強会５回、テクノツーリズム３ 回、スポーツ交流含む交流会を５回、国際交流成果発表会を実施しました。技術士を中心とした講師による講演討論会や、現委員体制で初めて実施した企業見学会には、多くの技術士・修習技術者に参加いただくことができ、青年層を中心とした会員へのサービス提供のみならず、技術士会への入会促進にも繋げる活動の道筋を築くことができました。

2013 年 1 月 26 日開催の技術士第一次試験合格者歓迎会・JABEE 修了見込者ガイダンス（参加者 200 名規模）において、修習技術者支援実行委員会との共催により、パネルディスカッションを企画・開催しました。

1-4. 各地域本部青年技術士組織との交流

地域本部交流会議を開催するとともに、大阪で開催された技術士全国大会において「青年技術士の集い」「テクノツーリズム」を開催しました。現時点で日本技術士会近畿本部内には青年組織が存在しないことから、近畿地域の有志で活動している近畿青年技術士懇談会の仲介を担い、同組織の日本技術士会会員を全国大会実行委員として、「青年技術士の集い」および「テクノツーリズム」を開催するに至りました。

「青年技術士の集い」はテーマを『青年技術士の交流にあなたは何を求めるか？』とし、討議テ

ーマを設けてのワールドカフェディスカッション形式としました。また青年技術士交流会誌を作成し、配布を行いました。来年度以降開催される全国大会においても、各組織との交流を継続する予定です。

青年層は企業内技術士も多く、出張や異動転勤等に伴う地域間の移動もあることから、全国の地域本部青年組織とのネットワークを活かし、技術士青年層のサポートにも努めて参ります。また、各地域における青年組織の設立や技術士会組織との関係を築く取り組みに対しても、引き続き連携を取って参ります。

1-5. 新たな情報配信の試み

青年委員会活動をより深く身近に理解していただくために、2011 年度青年技術士交流実行委員会活動年鑑を制作し、青年技術士交流実行委員会のホームページ及び活動毎のブログを運営しております。また、ホームページやブログを積極的に更新し、活動紹介、主催行事の事前広報および事後報告に活用しております。

さらに、統括本部事務局において導入を検討中の IT を活用した会員サービスの試用について協力・提言を行っております。

1-6. 委員会の運営・企画・管理および広報活動

上記の活動を企画・実施するため、毎月定例会議（運営委員会）を青年層の参加しやすい土曜日を中心に開催しています。

サーバーを利用して会議・例会への出欠管理や意見交換を行い、また議事録・資料等をデータベースにて保存管理することで運営の利便性や継続性、活性化を図っております。

また、2012 年 7 月には、さらなる委員会活動の充実と親睦を図ることを目的に合宿形式の委員会も開催しました。例会について「交流」を上位テーマとした参加型の例会を中心に行うこと、広報の充実化・システム化、委員の担当グループの割り振り、2013 年 6 月までの例会の担当者の決定といったことを話し合い、決定しました。その結果を踏まえ、2011 年に実施した例会企画案のコンペの中から実際の例会活動に取り組んでいます。

その他、国際交流や活動紹介のポスターを作成し、活動報告書と共に修習技術者ガイダンス・合格者交流会等で展示をしております。これらのポスターは単なる活動の概要ではなく、各国青年技術者の写真の活用や、メンバー紹介など、人物と活動を前面に出した PR を行うことにより、交流の楽しさを通じて技術士会への敷居の低さを実感できるようにしました。

例会グループ活動報告（2012 年 6 月～2013 年 05 月）

例会グループリーダー　田中　雅人

1. メンバー

田中、山中、小澤、片桐、佐藤、中村、石井

2. 今期の活動

① 例会：平成 22 年 11 月に開催した委員会合宿において、平成 23 年 8 月の全国大会のテーマ「地球再生へのメッセージ～世界・アジア・日本における技術士の役割～」をコンセプトとした、原則参加型の例会を企画することとし、平成 24 年 6 月まではコンセプトに沿った例会を実施した。
平成 24 年 7 月には改めて委員会合宿を開催し、青年委員会の活動方針などを委員全体での共有を図った。その中で、今期の青年委員会では最上位テーマとして「交流」を継続採用することとし、また、今期の各例会の担当と企画概要の決定を行った。例会企画としては原則参加型であることを継続した。

② サッカー/フットサル：活動を始めて今年で 6 年目となり、参加者の増加及び定着を目的にホームグラウンドを決め、定期的（2～3 ヶ月/回）な練習会を行った。また、日韓技術士サッカー大会の勝利及び地域本部との交流を目的とした合同練習会も実施した。

3. 成果

① 例会

例会の内容は今までと同様に原則参加型の例会の企画を継続している。特に 4 月特別例会では「合格者交流会」と銘打ち参加者間の交流が促進されるようなイベントを企画した。参加型の例会は委員を含めお互いが会話をすることで、適切な交流が図られるためか、参加者の満足度も高い。例会参加者も増加傾向にあることからも、ディスカッションやディベート、グループワークなど参加型例会は今後も継続して企画する方針である。

開催日	開催名（テーマ）	人数
08 月 05 日	ビアパーティー	21
09 月 23 日	全国大会・青年技術士の集い・ミニツアー	80
10 月 27 日	日本電鍍工業見学会	26
11 月 24 日	スマートフォン/ソーシャルメディア入門（講演会＋ディスカッション）	18
12 月 09 日	環境モニタリングにおけるプランクトン測定の役割（テクノツーリズム）	17
01 月 13 日	国際交流活動報告会	27
01 月 26 日	平成 24 年度 技術士第一次試験合格者・JABEE 修了見込者ガイダンス	290 *1
02 月 16 日	コーチングを体験しよう！（講演会＋トレーニング）	22
03 月 16 日	地質と日本酒～地質技術者が提案する日本酒の楽しみ方（テクノツーリズム）	21
03 月 23 日	ディベートを体験しよう！（討論会）	23
04 月 26 日	4 月特別例会「青年技術士展 2013　1次・2次試験合格者交流会」	77
05 月 26 日	オープン・イノベーションと知的財産戦略（講演討論会）	39

*1）修習委員会主催

② サッカー/フットサル

個人の技術や体力も徐々に上がってきていると共に、チーム内の交流も図れてきている。新しい参加者も増え、参加者は 30 名程度で推移しているほか、関東、北陸、そして東海と交流の幅も拡大している。平成 24 年 10 月に名古屋で行われた日韓技術士サッカー大会では、善戦むなしく韓国に惜敗してしまったが、韓国と対等かそれ以上に戦えるチームになってきていると考えている。

開催日	開催名（内容）	場所	人数
07 月 15 日	フットサル練習会	神奈川県横浜市	23
09 月 01 日	サッカー交流会	愛知県名古屋市	31 *1

10 月 17 日	日韓親善サッカー大会	愛知県名古屋市	43
12 月 08 日	サッカー交流会	千葉県市原市	31 *2
02 月 09 日	フットサル練習会	神奈川県横浜市	39
03 月 16 日	サッカー交流会	新潟県新潟市	33 *3

*1）中部本部主催
*2）千葉統括本部主催
*3）北陸本部との合同開催

4. 今後の展開

① 青年技術士（者）に対し、魅力があり、継続して参加したくなるような例会を企画するため、その内容だけでなく、委員の質も向上させて行きたい。
② サッカー/フットサルは、例会とは違った交流の手段のひとつとして有効になるように努めて行く。

IT-G 活動報告

IT-G　リーダー　山本

１．グループメンバー

山本　石井　嶌田　横田　松田　藤井　澤田石

２．目的

青年委員会の活動を円滑におこないかつ知名度を上げるために、情報を各種媒体に発信する。

３．今期の活動と成果

１）同報メールの発信

技術士会の広報機能である同報メールを使用し、各種例会情報を発信した（詳細の行事内容は例会 G 報告参照）。これにより青年委員会の活動内容を周知できた。

２）技術士会 CPD 行事予定欄への記事掲載

技術士会 HP への情報掲示を行い、イベントの案内をおこなった。これによりイベントの一斉告知と参加者情報の一元化が図れた。

３）スタッフブログによる情報の発信

輪番制でスタッフブログへの書き込みを行い、例会準備状況の告知を行った。副次的効果として委員間の士気向上が図れたと考える。

４）イベント時の各種広報活動

1 次合格者ガイダンス('13/1)、1 次 2 次合格者交流会('13/4)等で委員会紹介用のポスターやパンフレットを作成し青年委員会の情宣活動をおこなった。

５）組織維持の強化

情報管理体制の強化として自動バックアップ方式の検討及び実施への移行を開始した。

４．今後の活動・展開

既存の媒体を活用した広報活動は定常進化（知名度工場、参加者の発掘等）を遂げ、委員会活動の円滑化に貢献できたと考える。今後は以下項目を更に議論し活動の底上げを図ってゆく。

- 更なる知名度向上のために適切な媒体の選定
- 各種例会においてはリピータ層の確保と確実なフォロー
- 若手技術者がどのようなコンテンツを望んでいるのかの把握

以上

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2012 年 7 月 8 日

行事名	6 月例会:地域本部交流会
日時	2012 年 6 月 16 日　13:30～17:30
場所	日本技術士会　葺手第 2 ビル　A, B 会議室
担当者: (○印:リーダ)	○小澤俊博(記)、鈴木史人、片桐勝博
参加者数	24名　(内　委員・委員補佐:19名)

1．背景・目的

同日に「2012 年度青年技術士交流実行委員会」が開催され、全国各地域で活動を行っている地域本部青年委員会の委員長等が参集したため、各地域の青年委員会の活動に関する相互理解を深め、各地域における今後の委員会活動の活性化を図ることを目的として、各地域本部の活動報告及びグループディスカッションを実施した。

グループディスカッションは、青年委員会における活動テーマの 1 つが「若手技術士グループとの交流による研鑽活動の活性化であること、4 月の特別例会(合格者歓迎会)における「交流」をテーマとした一般参加のグループディスカッションにおいて「技術者間の交流の場」を求める声が多数あったことを受けて、ディスカッションテーマを『～青年委員会に求められる「交流」～』とし、「技術者間の有意義な交流」を実現できる青年技術者等のニーズに応えた委員会運営に向けて、今後の委員会運営の進め方、新たな展開等を見いだすべく実施した。

2．内容

青年委員間の相互理解、情報共有、及びグループディスカッションにおける事前情報提供として、各地域本部の活動報告を行った上で、『～青年委員会に求められる「交流」～』をテーマとしたグループディスカッションを実施した。

また、グループディスカッション終了後、交流会にて各地域の青年委員との親睦を深めた。

2-1.　地域本部の活動報告

各地域の青年委員会の活動状況に関する青年委員間の相互理解、情報共有を図るとともに、グループディスカッションにおける事前情報(各地域における活動状況等)とするため、各地域本部の代表者による活動報告を行った。

1) 九州本部(持田)
   - 小学生を対象とした自由研究支援や月例会などの活動を実施している。
   - 自由研究支援は、新聞広告、市政便り等で告知しており、非常に好評である。(参加費無料で実施)
2) 四国本部(小笠原)
   - 四国本部の青年委員会の設置に向けて、定期的に勉強会を実施している。
   - 本日の四国本部の定例会において、青年委員会の設置が承認される予定である。
3) 中国本部(高木)
   - 毎月 1 回勉強会を開催しており、その他、小学生を対象とした社会貢献活動等も実施している。
   - 勉強会は、技術者だけでなく、新聞記者、バーテンダー等、他分野の講師による勉強会も実施している。
4) 近畿本部(宮西)
   - 平日夜の定例開催は大阪近隣からの参加者が中心のため、休日開催による参加地域拡大も試みている。
   - 大阪で開催される今年度の全国大会では、9/23(日)の午前に青年の集い、午後にミニツアーを予定している。
5) 中部本部(高瀬・河原)
   - ワーキンググループ制を導入し、各グループで切磋琢磨しながら独自性の高い企画を立案実行している。
   - 名古屋で開催される今年度の日韓技術士会議では、青年委員会は、主に親善サッカーを担当する。
6) 北陸本部(坂東)
   - 北陸4県は遠隔のため、毎年拡大会議を各県持ち回りで開催し本部交流の機会を設けている。
7) 統括本部(嶌田)
   - 1, 2 ヶ月に 1 回のペースで講演会、ディスカッション、テクノツーリズム等の企画を開催している。
8) 東北本部(堀内)

- 昨年の震災以降定期的な開催が困難な状況だったが、徐々に従来の体制での活動に戻りつつある。

9) 北海道本部（田中）
- 「学校へ行こう！」として、テクニカルスクールや大学・高専を対象とした JABEE 説明会を実施している。
- 北海道本部では、予算について、疑問が挙がっているため、今後、確認していきたい。

2-2. グループディスカッション

A,B,C の 3 グループに分かれ、『～青年委員会に求められる「交流」～』をテーマとしたグループディスカッションを約 70 分実施した。グループディスカッションを行うにあたり、開始前に司会（小澤）より、ディスカッションの主旨・進め方の説明を行い、ディスカッション終了後には、各グループにおけるディスカッション内容・成果を共有するため、代表者によるグループ発表を実施した。

1) ディスカッションの流れ

① 現状の把握・共通認識（約 30 分）
- 各地域の青年委員会で行っている取り組み（講演会・テクノツーリズムなどの活動内容）や成果（参加状況・参加者の声など）、課題等を共有

② 今後の交流活動の方向性（約 40 分）
- 「新たにチャレンジしたい企画内容」、「より充実した企画とするための留意事項」など、技術者間の有意義な「交流」を実践できる委員会活動に向けた意見交換を実施

2) グループ発表（成果の共有）

① A グループ（リーダー・発表者：田中）
- 主催者側も学べることや楽しさ等のメリットが無いと活動を拡大していくことは難しい。
- 九州等の小学生を対象とした社会貢献活動は、子供との触れ合い等の中で、主催者側にも得るものがあるため良い事例である。
- 拡大委員会や全国大会等で各地域本部間の交流が行われているが、このような交流が継続しない。
- 地域間の交流促進としては、テレビ会議や Web 講演会の実施、情報共有する場の設置（全国メーリングリストによる活動報告の情報発信、情報共有サーバ等）、全国共通テーマ等による企画の実施等が考えられる。

② B グループ（リーダー・発表者：渡辺）
- 有意義な交流とは、情報量・相談者が広がる、やる気がもらえる、参加者が得をする、技術者以外との交流が行える、といったものである。
- 技術士会で有意義な交流を行っていくためには、テーマがある交流、先の展開が期待できる交流とし、人を集める広報をうまく行うことでメンバーの固定化を避けることが必要である。
- 今後の課題は、話題における年齢差、場の敷居が高く見えること（技術士会は難しそうというイメージ）である。

② C グループ（リーダー：品田、発表者：宮西）
- 「青年委員会に定着しない方」が求めている交流は、場づくりの面では、活動が計画的でないこと、開催地が限定されことが課題であるため、年間の活動計画をたてて、参加者が予定を立てやすくする必要がある。
- コンテンツについては、集まって楽しんでもらうコンテンツ（人を呼び込むため）と技術士ならではのコンテンツの 2 段階が必要である。青年委員会での技術士ならではのコンテンツは、青年層ならではの将来に向けたテーマにしていくべき。コンセプトに基づいた連番企画は、リピーターが増え、深い議論ができるのではないか。

2-3. 交流会

全国各地域で活動を行っている青年委員間の更なる交流を図るため、グループディスカッション終了後、同会議室にて、交流会を実施した。交流会は、立食形式として実施したため、偏ることなく、初対面の委員も含めて、各地域の委員間で積極的な交流が図られた。

３．成果と所感

地域本部の活動報告やそれを踏まえたグループディスカッションでは、各地域本部における活動状況の情報共有が図られるとともに、青年委員会に求められる「交流」に関する活発な意見交換が行われたため、今後の青年委員会活動の改善や新たな展開の一助になる交流会となった。

運営面では、地域本部の活動報告が想定以上に時間を要した。後のグループディスカッション、懇親会の予定を遅らせることで対応できたが、事前のスケジュールの見積が甘かったため、次年度は再考が必要である。

４．今後の展開

本地域本部交流会では、各地域における今後の青年委員会活動に向けた情報共有、ディスカッションを行ったため、全国の地域本部間での情報共有やコンセプトに基づいた連番企画など、ここで得た情報や意見を今後の委員会活動に活かしていきたい。

文責　小澤　俊博

地域本部の活動報告（九州本部）

地域本部の活動報告（北海道本部）

グループディスカッション　A グループ

グループディスカッション　B グループ

グループディスカッション　C グループ

グループ発表　A グループ

グループ発表　B グループ

グループ発表　C グループ

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日：　2012年7月8日

行事名	統括本部＆地域本部交流会（テクノツーリズム）
日時	6月17日（日）10：00～14：00
場所	日の出桟橋⇒東武博物館⇒東京スカイツリー周辺
担当者： （○印：主担当）	○鈴木史人（記）、小澤俊博、片桐勝広
参加者数	15名

１．背景・目的

拡大委員会翌日の午前中に開催が恒例となった東京周辺のテクノツーリズムを開催。統括本部、地域本部の交流を深め、今後の連携した活動の一助としていくことが目的。今回は、水上バスで浅草まで移動し、東京の新名所である東京スカイツリー周辺を散策することにした。

2. テクノツーリズム内容

●9:45　日の出桟橋（待合室）集合
●10:00 頃発　日の出
↓　　水上バス
●10:40 頃着　浅草着　⇒東武浅草まで徒歩
↓　　東武伊勢崎線
●11:00 頃着　東向島駅
↓　　東武博物館
↓　　昼食(寺方蕎麦 長浦 向島本店)
●13:20 頃　東向島
↓　　東武伊勢崎線
●13:30 頃　とうきょうスカイツリー駅
↓　　東京スカイツリー周辺でウォーキング
●14:00 頃　押上駅着にて解散

3. 成果と所感

統括本部及び地域本部間の交流を深めることができたという点では一定の成果が得られたと思う。しかし、実行計画については反省点が多い。当初は、水上バスを利用したのち、本所防災館を予定していたが、大凡の人数が把握できたのが、2 週間前であり、希望日時での予約ができなくなかった。また、梅雨の時期で雨も想定されたため、浅草周辺で駅近にある東武博物館で実施することにした。そのため、内容が中途半端になってしまった印象が残った。

4. 今後の展開

０７年に、委員スタッフが訪問したことのある博物館などを紹介し、ＤＢ化を開始した。現在、登録が滞っているため再開してはどうかと思う。

参考：http://www.youngengineer-jp.net/modules/xpwiki//?テクノツーリズム

以上

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2012 年 8 月 18 日

行事名	8 月例会 ビアパーティ
日時	2012 年 8 月 5 日（日）19 時 00 分～21 時 00 分
場所	Burger & Beer VIBES（港区芝 4-13-12）
担当者: （○印:リーダ）	○山中　淳至、山地　真吾（記）
参加者数	21名（内訳:一般　12名（会員　9名、非会員　3名）、委員　7名、委員OB 2名）

１．背景・目的

青年委員会では、真夏の 8 月の恒例行事としてビアパーティを開催している。この行事は青年委員会の例会としては最も古くより続いている。近年は技術士二次試験受験生の筆記試験終了を労う場として、また試験の様子を知りたい未受験者の情報収集の場としてや若手技術者の気軽な交流の場として活用してもらうべく、試験終了後の夜に開催している。

２．内容

開催の場所は、当日までの幹事の負担軽減や前年開催の課題となったドタキャン・ドタ参に対する融通面が聞くことを優先することとした。事前に料金および飲み放題の内容を店と調整し、料理については人数に応じて柔軟に対応してもらうこととした。1フロアを貸し切り、武井委員長の挨拶を皮切りに飲み放題のドイツ、ベルギー生ビールを片手に試験の様子や口頭試験に向けての情報交換、近況報告が繰り広げられた。

３．成果と所感

今回は開催時間より 2 時間ほど前から委員内でゼロ次会の形で始めていたこともあり、始まる前からかなりリラックスムードでの開催となった。それが功を奏したのか開催前の変な緊張ムードが見られなかった事は（色々な意見はあるかと思われるが）個人的にはとても良い印象であった。全員が一箇所に会する形の席配置ではなかった（4 テーブル）が、適度に席の移動も行われており、2 時間の時間枠の中で各々が親交を深めていたように見受けられた。

会の終わりにおいては「IT21　の会」の紹介あり、受験生の締めの一言あり、とメリハリも聞いており、会の目的は果たせたものと思われる。

４．今後の展開

ビアパーティについては、歴史がある恒例行事であることに加え、構えず気軽に参加することを促せる例会の一つとして今後も継続して開催したい。

今回は場所や開催前のゼロ次会開催と、これまでとは少しやり方を変えた部分がある。こうした部分については十分に検証を行い、良い所は継続し、悪いところは反省した次に繋げられるようにしたい。特に広報の早期化については今回の結果を十分に生かせるようにしたい。

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2012 年 9 月 29 日

行事名	トヨタテクノミュージアム産業技術記念館 ガイドツアー （中部・北陸・統括本部合同テクノツーリズム）
日時	2012 年 9 月 2 日（日）
場所	トヨタテクノミュージアム産業技術記念館 繊維機械館・自動車館（名古屋市内）
担当者: （○印:リーダ）	中部本部:○土性 弘明（中部青年技術士会幹事） 統括本部:山中 淳至、 藤井 佳直、 武井 遼
参加者数	ー

１．背景・目的

テクノツーリズムの目的の一つである「地域性を生かした産業技術の紹介」として、愛知県発祥のトヨタグループ施設見学を行った。グローバル企業であるトヨタグループの豊田家創業の起点ともいえる、自動織機産業から自動車産業までの技術要素・歴史的経緯・発明秘話などが実演・展示されており、一見すると関連性の見られない織物と自動車という製造物を支えるモノ造りの原点を垣間見ることができた。今回は産業技術記念館の施設のうち、繊維機械館と自動車館のガイドツアー見学を行った。

２．活動内容

＜10：00～11：00 繊維機械館ガイドツアー＞

糸を紡ぎ、布を織る技術の基本と、繊維機械技術の変遷を紹介する施設であった。 豊田佐吉が明治 44 年に自動織機の研究開発のために創設した試験工場の場所と建物の一部をそのまま活用した施設内には紡ぐ・織る初期の道具から機械、さらに現代のメカトロ装置の繊維機械に展示されていた。一部の機械は実演や動態展示によって、技術の進歩の様子が目で見て分かるようになっており、オペレーターによる実演で、糸を紡いだり、布を織ったりする原理を体感できた。織機を無人で稼動させる自動化や、糸切れなどのトラブルが発生したときに全稼動を自動停止する機能など、トヨタ生産方式の原点ともなる自働化やカイゼン・不良（ムダ）の削減などの考え方が、当時より発想されており生産現場で実現されているものであることが理解できた。

＜11：00～12：00 自動車館ガイドツアー＞

自動車産業の創業時から現代に至るまでの自動車技術とその生産技術の変遷や、自動車の仕組みと構造部品の展示・説明がされていた。トヨタ自動車を中心とした内容でありながら、自動車産業全体の発展が分かるように工夫されており、自動車部品の金属加工技術に関わる展示・実演もされていた。東京オリンピック頃の道路環境の整備により、我が国の輸送手段がモータリゼーションへと移行していくが、遡ること関東大震災を境にアメリカを中心とした自動車産業が日本を新市場として開拓していくのに対抗して、トヨタ・ホンダなどの国産自動車産業が発展していったとの視点で、国内自動車産業の流れを見せる展示内容は、新たな歴史観をもって見学することができた。

３．成果と所感

織機の発明に生涯を捧げ、トヨタ生産方式の原点ともいえるモノ造りの仕組みを築いた豊田佐吉、そして佐吉の長男として自動車製造に取り組み、トヨタ自動車工業を創業した豊田喜一郎。施設の展示内容はトヨタイズムを継承する志向を強く感じるものであったが、このような施設を始めとしたトヨタ学校とも称される同社の取り組みが、トヨタグループの強みであることを実感することが出来た。一方で、今後の自動車産業が電気自動車を中心とした産業に展開していく可能性を考えた場合に、製造物の価値創出が、従来の部品やすり合わせといった要素技術の積み重ねよりも、電子製品に近いものになると推測されるため、日本の自動車産業が現在の家電製品産業が置かれている状態に陥ることも危惧される。同社も、従来の現場視点での改善活動の積み重ねだけでなく、世界の市場で勝ち抜いていくためには新たな強みが求められていくのではないか。

今回の見学コースは過去の歴史を振り返る内容が中心であったため、今後の同社の展開を見て取れることはなかったが、今後の事業展開によって今後どの様な展示がなされていくのかについても考え深いものがあった。

土性弘明氏を始めとした中部青年技術士会関係者による、事前準備と当日の円滑な案内により、その後の昼食会も含め有意義な時間を過すことができた。

４．今後の展開

11 月の日韓国際会議開催地である名古屋で、事前交流として中部本部の青年技術士会と準備を進めてきたが、北陸本部も交えて青年関係者を中心に取り組むことができ、今後の後継者同士も親睦を深める機会を持つことができた。今後も、地域本部と合同で開催できる企画について、継続的に取り組んで行きたい。

以上

初期型の自動織機

環状自動織機の実演

トヨタスタンダードセダン（AA 型）

初代トヨペットクラウン

板金加工用プレス機

自動溶接機

自動塗装工程

自動ラインモデル

ﾄﾗﾝﾍﾟｯﾄ自動演奏ﾛﾎﾞｯﾄ（ﾄﾖﾀﾊﾟｰﾄﾅｰ）前で記念撮影

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2012 年 10 月 27 日

行事名	第 39 回　技術士全国大会　青年のつどい及び交流会
日時	平成 24 年 9 月 23 日(日)9 時 10 分～17 時 00 分
場所	大阪国際交流センター
担当者: (○印:リーダ)	○武井　遼、中村　聡、山中　淳至、松田　みゆき(記)
参加者数	約80名

1．背景・目的

2012 年度の技術士全国大会が 9 月 21 日～23 日にかけて開催され、青年の集いは最終日にあたる 23 日に行われた。今年は大阪開催であったため、西日本地域の会員が多く参加されていた。前日の 22 日には前夜祭として、大阪では焼き肉で有名な店「アジヨシ＠鶴橋」で一足早く交流会が行われた。

2．内容

2-1 青年のつどい

(1) 幹事の挨拶(近畿青年技術士懇談会:井上氏)

今年の幹事である近畿青年技術士懇談会の組織の説明からはじまり、近畿では、支部という形ではなく「懇談会」として有志で立ち上げ、昨年 20 周年を迎えられた。現在もあえて懇談会と位置付けているのは、技術士どうしが気軽に語り合い、刺激し合える場としてありたいという姿から運営を行っている。

つぎに、今回の会場となった大阪(人)についての紹介があり、大阪人はどういう人種かというと

- エスカレーターでじっとしていない(歩いてしまう)
- エレベーターでは中に入ると行き先の階よりも先に「閉」のボタンを押す

とせっかちな部分を強調しつつユニークに紹介され、会場の笑いを誘っていた。

今回は近畿青年交流会が運営をされたが、会の進行と仕掛けがよくできていた。我々も例会に取り入れたいと思う点は主に 2 つ。

①グループ分け

受付に数種類のアメが用意され、受付を済ませたら好きなアメを一つ選ぶ。会場に入ると 6 つのテーブルの上にアメの袋が置いてあり、アメを選ぶことでグルーピングされる仕組み。統括本部の4人の内、3人は同じアメをチョイス。ちなみに大阪ではアメをアメちゃんというらしい。

②ブレイクダウン(10 分間)

ディスカッションに入る前に、ブレインクダウンを行った。相手と共通する部分を探すというもので、共通点が見つかれば名前と共通事項を記入し、相手を変えて繰り返す。一番多く記入できた人には、幹事から景品が手渡された。会場を盛り上げるとともに、遠いところから来て下さっているというおもてなしの気持ちが感じられた。

(2) ディスカッション

全体のテーマは「青年技術士の交流に何を求めるか？あなたは、"satisfaction?"」として、青年技術士であること／目指すこと、および青年技術士を中心とした交流に、自分が何を求め、また何を求められているのか？そして、その思いは満たされているのか？時代の変遷の中で、自分と青年技術士の集まりとのつながり、それを通しての世間とのつながりを、もう一度見つめなおしてみよう、という趣旨の下に、4 段構成でディスカッションを実施した。

- ワールドカフェ第 1 ラウンド(30 分)

第一ラウンドでは、班分けされたメンバーで「交流」することにより得られる事柄を列挙した。地方(または支部)では地理的、人員的な問題があるためか「集まる」ということは大きなニーズではあるが、また、労力も不可欠であることが浮かび上がった。

Satisfaction な部分:　情報収集ができる/人脈の形成が図れる/業務のヒントが得られる/各地域の活動を知る

Unsatisfaction な部分:　　社会とのつながりが弱い/技術の深堀ができない/知名度が低い/若い人が集まらない

- ワールドカフェ第 2 ラウンド（30 分）
  第二ラウンドは、誕生月でメンバーをシャッフルし、雰囲気を変えてディスカッションを実施した。メンバーが異なるため、軽く自己紹介と第一ラウンドの振り返りを行い、他の班で出たアイデアを参考にしながら「交流」について、共通する課題を列挙した。
- ワールドカフェ第 3 ラウンド（30 分）
  第一ラウンドの班に戻り、アイデアの整理と、模造紙に結果をまとめる作業に移った。まとめ 15 分、書く作業 15 分と短い時間の中、技術士間の交流に"Satisfaction"していく内容をピックアップした。
- ワールドカフェ第 4 ラウンド（30 分）
  最後に、各班の結果を見比べた後、各自の"Satisfaction"をひとつ挙げ、総括を行った。参加者それぞれの"Satisfaction"から「楽しみ系」、「交流系」、「拡大つながり系」、「能力向上」系という大きく 4 つのキーワードでまとめられた。

2-2 ミニツアー

ディスカッション終了後、ミニツアーを実施。3班に分かれ、下記の名所を入れ替わりで巡った。

- 背割下水
  大坂城築城の際、豊臣秀吉によって造られたと言われている石積の下水溝で、道路に面して建物の裏側の建物と建物が 背中合わせになっているところを割るように造られたことから「背割下水」と呼ばれた。着手したのは天正 11 年（1583 年）といわれている。
- 松屋町（まっちゃまち）
  松屋町筋という南北に縦断する通りに、雛人形や五月人形、玩具と駄菓子などの問屋がこの通りに集まっている場所。なぜか、人形屋なのに、花火を大量に置いている店が多数。
- 通天閣
  大阪を象徴する「元祖スカイツリー？」の散策。今年開業 100 周年を迎え現在でも観光地として賑わっている場所。

2-3 交流会

ミニツアーの後、路面を走る阪堺電車（チンチン電車）を貸しきって交流会が行われた。参加者が 1 両の定員 35 名を上回り、2 両に分かれて交流会が行われた。電車は、恵美須町から堺を経由して天王寺まで途中数回の休憩を挟み、2 時間かけて走るコースで、通常立ち入れない車庫の前では記念写真を撮ることができた。

はじめは静かであった空気もアルコールと共に砕けた自己紹介となり、終着に向かう頃にはすっかり車内は盛り上がった。

3. 成果と所感

参加者が全国から集まるということで、招く側も、参加する側も共に労力が必要な会だと感じた。今年は近畿青年技術士懇談会の方々にお世話になったが、少ないメンバーで青年のつどい～打ち上げまでの手配は大変だろうと思った。有名だけど、ひねりのあるミニツアーのチョイスは「遠路からよく来て下さいました」という気持ちが感じられた。この気持は今後の例会に生かしていきたいと思う。

4. 今後の展開

- ディスカッションの導入や進め方等は参考になるものが多く、今後の例会運営に生かしていきたい。
- 次回の青年のつどいは北海道で開催される。今回の青年のつどいが参加者にとって"Satisfaction"であることを祈り、来年、また参加し、全国に散らばる技術士たちとの交流を継続していきたい。

以　上

5. 写真

−近畿青年技術士懇談会：幹事　井上さんの挨拶−

−統括本部：武井委員長の挨拶−

−ディスカッション風景−

−アイデアをカテゴリ別に整理−

−打ち上げツアー（チンチン電車）−

−チンチン電車一両目メンバー−

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:　2012 年 10 月 29 日

行事名	10 月例会:日本電鍍工業見学会
日時	2012 年 10 月 27 日(土)14 時 00 分～16 時 00 分
場所	日本電鍍工業本社工場
講師、発表者	日本電鍍工業:伊藤麻美様、高橋真紀子様、原一幸様　他
担当者: (○印:リーダ)	○昆野、武井、嶌田
参加者数	26名(内委員6名、委員補佐2名)

1．背景・目的

日本電鍍工業様の全面協力により、本社工場の見学が可能となった。同社は55年続く老舗企業。腕時計に始まり、管楽器、医療機器等様々な業界にメッキ技術で貢献している。一点から受注し、数千社を相手に事業を行っており、細やかなサービスを実施できる経営面の巧さもまた、同社の魅力である。

本企画は、青年委員会の例会としては例の少ない、現地見学のスタイルを取っている。今後の活動の発展を促すトライアル企画でもあり、参加者と外部協力企業様との交流の他、委員会としての活動幅の拡大、活性化を目的としている。

2．活動内容

14 時開始に合わせ、委員スタッフは 13 時より現地入りし、準備を開始した。開始 10 分前までには参加者全員が揃った。内容については以下のとおりである。

- ご挨拶　･･･　日本電鍍工業　代表取締役　伊藤麻美　様
- 事業説明　･･･　日本電鍍工業　営業グループ　高橋真紀子　様
- 工場見学　･･･　日本電鍍工業　技術グループ　原一幸　様　他
- 質疑応答、総括、記念写真撮影

同社の会議室をお借りし、講義形式で事業説明を実施した後、3グループに分かれて工場内の見学コースを巡回した。見学コースは、サンプル品展示スペース、検査部門、開発部門、メッキ工場内。それぞれの部署では、各担当者にご説明を頂いた。質疑応答はその都度実施したが、最後に会議室に戻ってから、今後の展開や経営全般といった質問が出た。

3．成果と所感

参加者の質問が多岐に及び、質問数もとても多かったが、全ての質問に対して丁寧なご回答を頂くことができた。この点についてはアンケート調査でもご好評の声が寄せられており、日本電鍍工業様のイメージはとても良かったのではないかと思われる。会場内では、待ち時間の間に、参加者同士でのコミュニケーション、名刺交換等の様子が見られた。また、社長の伊藤様の周りには常に参加者が集まり、意見が交わされていた。単純に技術の見学会としてだけではなく、交流の場としてもある程度の成果は挙げられたのではないかと思う。

参加者について、当初は青年向けとして企画していたものの、実際は平均年齢が 50 代となっていた。若手への PR が今後の課題ではある。キャンセル等もあったが、最終的に 20 名中 18 名の参加となった点はまずまずの成功と言える。

今回はあまり大きく出ず、見学後の懇親会は有志に委ねたが、参加者層や開催場所等を勘案することで、委員主導の懇親会実施の可能性も課題として浮かび上がった。

開催までの間、数回訪問をし、現地打ち合わせを行った。このことで、相手方と親密になれた。また、見学コースの事前把握や、現地までの交通の感覚が把握でき、当日の案内や段取りに役立った(見学時間の見切り、バス亭からの誘導実施など)。また、開催場所の関係で直前の運営委員会が大宮ソニックシティの会議室となった。外部会議室にしては 1 万円以下とリーズナブルで、部屋の広さや設備も把握した。今後の外部でのミーティングに利用できそうである。

外部開催は協力企業さんに委ねられるので、当日の委員の負担は少なめである。その反面、事前の現地打ち合わせが効を奏す部分が多く、是非綿密にすべきである。また、運営委員会の出席、例会の参加者も予想外に少なくなるので、それらの対策や、開催場所の勘案も忘れてはならない。大宮開催に限っては、まずまずのバランスと思われる。

４．今後の展開

技術士会外部での実施は、色々な形で出来ると思う。今回の企画を実績として、今後の委員会活動を充実させていきたいところである。

同時に、技術者間の交流もまた、青年委員会活動の目的の一つであるから、懇親会や相互連絡の構築といったサポートを織り交ぜて考えることも、今後の課題と言える。

日本電鍍様と青年委員会との親交が深まっている。まだまだ先の話にはなるが、今後別の切り口で企画を練り、同社協力により再度の開催を考えてもよいかもしれない。

―以上―

【記：昆野　哲也】

例会（日本電鍍工業見学会）の模様　1

事業説明（高橋氏）

参加者の様子（講義中）

見学の様子（左端：原氏）

質疑応答の様子（右端：伊藤氏）

総括（武井委員長）

記念写真（本社入口）

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:　2012 年 12 月 15 日

行事名	11 月例会:スマートフォン例会
日時	2012 年 11 月 24 日(土)13 時 30 分～17 時 00 分
場所	葺手第二ビル 5F
講師、発表者	田中委員、藤井委員補佐、澤田石委員補佐
担当者: (○印:リーダ)	○澤田石朋彦、田中雅人(記)、藤井佳直
参加者数	17名

1．背景・目的

青年委員会の中でもスマートフォンやソーシャルメディアが急速に普及している一方、それらの活用法やリスク管理について十分な理解を持っていないメンバーもいることが浮き彫りになっていた。スマートフォンやソーシャルメディアに関する ICT の分野に精通しているメンバーがそうでないメンバーに対してアドバイスなどを行っていたところ、この内容を講演にして例会のテーマにできるのではないかと考えた。

本企画は、スマートフォン／ソーシャルメディア難民を救済するという目的に加え、青年委員会の若年層メンバーらが講師となり講演会を行うことを通じ、若い世代の活躍の場の提供や青年委員会の活動のアピールを目的としている。

2．活動内容

講演内容は以下のとおりである。

第一部「スマートフォン入門」田中雅人

第二部「ソーシャルメディア入門」澤田石朋彦

第三部「スマートフォン／ソーシャルメディアの影響について」藤井佳直

講演後は参加者各人のスマートフォンの活用術を見出すことを目的とし、「スマートフォンを使いたいか／使いたくないか」を大きなテーマとして、スマートフォン／ソーシャルメディアの各自の活用法についてディスカッションを行った。各グループのディスカッション内容の発表では、スマートフォンやソーシャルメディアを活用するうえでの疑問点や不満点、メリットやデメリットなどが挙げられ、コーディネータの方々のおかげもあり、おおむね意図したディスカッションが行われたことが分かった。

ディスカッション後の質疑応答を目的とした交流会ではほとんどの参加者はかえってしまったが、一部の参加者は熱心に質問をしており、その要望に応えることができた。

3．成果と所感

講演ではデモを交えたり、発表資料(パワーポイント)はシンプルに、発表資料は発表原稿を基に詳しく記述したことによって、講演内容の理解を促進することができたと感じた。また、講演者各人の持ち時間は30分と短かったが、その分講演内容はコンパクトにまとまりわかりやすいものになっていたと感じた。ただし、講演時間が超過してしまっていたため、リハーサル不足は否めない。

参加者の平均年齢は 55 歳と高齢になったが、スマートフォンの初心者を対象にいているため高齢化するのは当然ではあるが、青年層の技術者を対象とした交流の場を提供していくのが目的であるため、参加者の低年齢化を図るよう注意が必要である。

また、すべての講演が終わる前に帰ってしまう参加者が何人かあった。スマートフォンやソーシャルメディアの具体的な活用術を期待していた参加者もいたようなので、各人によって異なる活用術は講演内容には盛り込まず、ディスカッションで見出してもらうということを事前にもっと説明しておくべきであった。参加料が無料であったことも、途中退場を促した要因である可能性もある。

ディスカッションのグループは、参加者リストによりあらかじめ決めたいたが、ドタキャン/ドタサンを考慮し、青年委員会のみのグループを作っておくといった柔軟性を持たせていたため、参加人数の変更にも柔軟に対応できた。

4．今後の展開

若年層が表舞台で活躍できる企画を続けていきたい。

―以上―

青年技術士交流実行委員会　活動報告（案）

報告日：2013 年 1 月19 日

行事名	テクノツーリズム講演会
日時	平成 24 年 12 月 9 日（日）
場所	青海フロンティアビル
講師、発表者	（社）埼玉県環境検査研究協会　山岸知彦氏、山崎浩司氏
担当者： （○印：リーダ）	○山中、藤井　（記）、山崎
参加者数	17名（内　関東9名、北陸8名）

１．背景・目的

12 月の企画例会として、テクノツーリズム講演会を実施した。今回は、名古屋で開催された日韓サッカー大会の慰労会を兼ねて北陸本部とのサッカー合同練習会を前日に行い、それに併せて青年委員会の例会として開催した。

２．企画準備と例会内容

1）企画準備

開催場所は前日のサッカー合同練習会に参加していた北陸本部のメンバーも参加できるように、また講師、参加者の利便性を考慮し、フットサルメンバーの山崎氏、前回協力いただいた佐藤氏とともに企画を進めた。会場は交通の便、講演に必要な広さ等から、テレコムセンター駅に直結している青海フロンティアビルとした。

今回の例会テーマは、大気汚染、水質汚濁及び土壌汚染など、生活環境に対する関心/意識が企業だけでなく個人レベルでも高まっているが、その基準や指標及び測定/分析方法などを知る機会は少ないというところから、環境分野についての理解を深めることを目的に、現在の環境基準に基づいて行われる測定/分析方法やヒトへの環境影響及び実際のフィールドでの環境モニタリングに関する講演とした。

2）例会内容

・「微小粒子状物質（PM2.5）の健康影響と環境基準」　　山崎浩司氏（技術士補　環境部門）

【概要】わが国では 2009 年、従来の浮遊粒子状物質(SPM)濃度の環境基準（粒子粒径：10μm 以下）に加え、粒子状物質のうち健康影響が大きいと考えられる粒子粒径が 2.5μm 以下（髪の毛の約 25 分の 1）の微小粒子を $PM_{2.5}$ として新たな環境基準を設定した。$PM_{2.5}$ は肺がんや喘息に悪影響を及ぼすといわれ、発生源は土壌粒子、海塩粒子などの自然起源のもの以外に、工場や家庭からも発生し、タバコの煙やディーゼル粒子などもその一部である。わが国における環境基準は 15μg/m³（年平均）及び 35μg/m³（日平均）とされており、平成 22 年度の東京都の測定結果ではほぼ基準内であった。微小粒子の測定方法は秤量測定の他、連続的に測定が可能なフィルタ振動測定を採用している。環境省では、$PM_{2.5}$ の測定局を平成 25 年度までに整備し、更なる科学的知見を集積する計画である。

・「環境モニタリングにおけるプランクトン測定の役割について」　　山岸知彦氏（技術士　環境部門）

【概要】環境汚染等に関する各種規制では化学物質等に関する有害性評価や暴露評価など、化学的なリスク評価をする必要がある。環境モニタリングとはその中の 1 つとして、環境中の排ガス、排水中の汚染物質の濃度や挙動についてモニタリング（監視・追跡）するための観測調査（継続監視）である。本講演は公園内に設置されている湖沼水質浄化試験に関するものであり、湖沼の一部を区切り、その枠内のプランクトンの種類、量を把握し、生物学的水質階級の判定や富栄養化度の評価を行うことで、プランクトンの発生抑制・防止対策の検討に資することができる。試験の結果、水質浄化の可能性は示唆されたが、湖沼内植物への肥料の供給など、プランクトンが発生する外的要因などから達成は難しい。最終的な判断は管理団体であるので、湖沼内の水質を良好な状態に維持するためにはできるだけ簡易かつ低コストの水質浄化技術が求められる。

３．成果と所感

- 実際に携わった試験の写真を用いた具体的な説明や適宜身近なものに例えた簡単なクイズを出しながら進めることで、理解しやすい内容となっていた。
- 環境モニタリングにおけるプランクトン測定の役割について、我が国の環境に関する法体系の説明を交えて講演をいただいた。機器分析による環境測定ではその測定した時点での環境しかわからないが、プランクトンなど生物指標を使った調査により、より長いスパンでの環境影響を知ることができるなど、興味深い講義であった。
- 講演会場のビル内には複数の会議室があり、案内表示も用意していなかったため、委員が外に立って誘導した。事前に会議室の詳しい場所を知らせることができず、初参加の人にはわかりにくかったため、今後、外部で会議室を使用する場合は事前に会議室の場所を周知すると共に、当日は案内表示が出来るように必要な物品を持参して運営にあたりたい。
-

４．今後の展開

- サッカー練習会とテクノツーリズムのセット企画は地域間、世代間、異業種間などの交流の場として、有効であると考える。中部本部からの参加者もあり、関東、北部以外の地域本部との連携を強化してききたい。

5. 写真

「微小粒子状物質（PM2.5）の健康影響と環境基準」

山崎浩司氏（技術士補　環境部門）

「環境モニタリングにおけるプランクトン測定の役割について」

山岸知彦氏（技術士　環境部門）

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:　2013 年 2 月 16 日

行事名	1月例会:青年技術士実行委員会活動中間報告会及び国際交流活動報告会
日時	2013 年 1 月 19 日(土)
場所	葺手第二ビル技術士会 A/B 会議室
講師、発表者	中間報告会発表者:田中委員、山本委員、鈴木委員 国際交流活動報告会発表者:野々垣智樹氏(士・情報工学)、竹内翔氏(修習・衛生工学)、昆野哲也氏(士補・上下水道)
担当者: (○印:リーダ)	○鈴木史人(記)、太田道宏、昆野哲也、葛西健司、武井遼
参加者数	27名

１．背景・目的

青年委員会の国際交流活動の紹介を技術士会会員/準会員に紹介し、青年技術士/若手技術者の国際交流の関心を持ってもらう。また、12 年度の実績を今後の青年委員会の国際交流への継続的活動に繋げていく。

２．例会内容

２．１．委員長挨拶と青年技術士実行委員会の紹介（１４：００～１４：１０）: 武井委員長

日本技術士会の組織図から青年技術士実行委員会の位置づけと組織紹介、活動概況を説明。

２．２．青年委員会２０１２年度活動中間報告会（１４：１０～１４：５０）

（１）例会グループ：田中委員

例会グループは、各例会(サッカー/フットサル交流を含む)の支援やアンケート収集による会員サービス向上・スタッフ資質向上を図っている。2012 年度の例会の実績(3回)と今後の例会(5回)の取り組みを説明。

（２）広報・IT グループ：山本委員

2012 年は、従来までの会員向け／新合格者向け／一般向けの広報活動に加えて、情報体制の強化に向けた取り組みを開始。情報体制強化として、外部向け広報の強化、委員連携の強化、組織維持の強化を軸に進めていく。

（３）国際交流グループ：鈴木委員

青年委員会の国際交流活動(YEAFEO 派遣支援/日韓技術士会議/二国間交流(香港・オーストラリア))の概要を事例と共に説明。2012 年度は、カンボジア開催の YEAFEO 派遣支援、名古屋で開催の日韓技術士会議の親善サッカー大会に協力、香港交流の再開検討を進めている。

Q:青年委員会では、技術士試験に向けた受験指導は行っていないのか。

→A:直接的な指導を行っていない。技術士との交流の中で考え方・取り組む姿勢を見て学ぶ機会はあると思う。

Q:国際委員会との連携はされているのか？

→A:日韓会議では、サッカー大会があり連携しているが、その他の国際交流活動については、委員間と連携ができているとは言えない。今後の課題。

２．３．国際交流報告会～YEAFEO/CAFEO 活動成果発表（１４：５０～１６：３０）

開催国のカンボジアは、人口 1481 万人、GDP(2012 年)128 億ドル(鳥取の約 1/2)で、農業が主産業である。YEAFEO の参加国は、ASEAN10 カ国で、香港と日本がオブザーバして参加している。日本は毎年参加しており、参加国から印象はいいようだ。国際会議は、1 日目に YEAFEO 会議/CAFEO 分科会/Welcome ディナー(プレゼント交換有り)、2 日目にCAFEO 本会議/講演、3 日目には講演/工場見学とFarewell パーティがあった。観光と会食の機会が多く、対 ASEAN 親善交流の場としては絶好の機会と言える。

交流の成果として、3.11 以降途絶えていた香港との二国間交流の復活と活性化について香港サイドよりよい返事をいただいたこと、シンガポールから二国間交流に興味を示してきたことが挙げられる。

また、各国代表に、①関心ある社会問題、②日本に対するコメントや要望についてアンケート調査を実施した。最も関心があったのは、3.11 の災害に関することで、災害対策や復興の話、災害時の日本人の行動や精神について学びたいという声があった。

YEAFEO 参加者は、Facebook の活用が昨年同様続いており、コミュニケ―ションの場を確保した。

【ディスカッション】

①例会参加者から YEAFEO/CAFEO のコメント・感想

- 日本で行う国際交流があれば参加してみたい。
- 1週間休みを取るのは厳しいが、機会があれば行ってみたい。

②青年委員会への提言

- YEAFEO/CAFEO は ASEAN 諸国が一堂に集まる場である。文化の違いを勉強する場にもあり、毎年参加を続けてもらうと共に、派遣者間での引き継ぎも工夫して実施してもらいたい。
- 海外業務促進実行委員会と連携を図る等、技術士会全体で国際交流について、各委員の関係者間でディスカッションをしてはどうか。

③国際交流をするための語学力は？

- 学生には TOEIC800 点を目安に海外での発表の許可をしている(若干未達でも妥協はしない厳しい
- 姿勢も必要)。ディスカッションは難しくても、TOEIC600 点程度でも発表はさせられるように思う。

２．４．講評（１６：３０～１６：４０）:

（１）出崎太郎氏（技術士・建設、総合技術監理）

CAFEO/YEAFEO 等の国際交流では文化的な面を含め、様々な点で見識を深められると思う。今後も積極的に国際交流活動を続けてもらいたい。

（２）武井委員長

今回の例会で、様々な意見を聞かせていただいた。反省点は、今後の活動に活かしていきたい。

３．成果と所感

- 青年委員会活動や国際交流活動を技術士会会員にアピールできた。
- 今年の国際交流報告会は、YEAFEO/CAFEO に絞ったこともあり、交流会を含め、国際交流活動について深いディスカッションが参加者とできたように思う。
- 質疑応答を、例会参加者と発表者とのディスカッションの場としようとしたが、通常の Q&A でかなりネタが切れてしまい、ファシリテーションがうまくいかなかったのは大きな反省点。青年委員会の OB に助けてもらった。

４．今後の展開

- 今回は、報告会の会費を会員には無料とする代わりに、資料の配布を最低限とした。自由記述の要望で、資料の配布を求める意見が 2 件あるように、アンケート結果(全 11 件)で、資料の内容に関する評価が他の項目に比べ、低かった。コピーの印刷速度は遅く、時間と手間はかかるが、現状では、PPT のコピーは準備した方がよさそうである。
- アンケートで Q4（今回の例会を、どのように知り、何で参加を決めましたか。下枠内の記号をお書き下さい。）で、例会を知る/決めるに至った情報手段を選択肢で選ぶが、参加者は“その他”として“例会内容”により決めたと記載（3 件）し、アンケートの目的の意図していない記載が目立った。
- 例会は、参加者にとって、より有意義となるべく企画し続けることが重要。良いイベントを伝統として残すと同時に、適度に新規開拓を行い、記録として確実に保存、次代に残すことが大切である。
- 2012 年の YEAFEO では各国にアンケート調査を実施し、ASEAN 技術者の関心事や、日本に対する意見を聴取できた。今後の YEAFEO 参加意義の強化、継続的・連続的活動への布石としたい。

以 上

【補足】青年委員会組織構成
運営委員会
日本技術士会への協力
年度活動方針の決定
各Gr活動の合意形成
IT・広報Gr
各種イベント案内
実施結果報告の公開
活動年度作成
例会Gr
交流イベント開催
テクノツーリズム
年間10回程度開催する
例会企画を統括するグループ
（個々の例会幹事は委員全員で分担）
国際交流Gr
日韓技術士大会
香港工程師学会交流会
CAFEO／YEAFEO
国際交流活動を
支援するグループ

日本技術士会青年技術士交流実行委
Young Engineers Committee
The Institution of Professional Engineers, Japan

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:　2013 年 2 月 16 日

行事名	平成 24 年度技術士第一次試験合格者・JABEE 修了見込者ガイダンス
日時	2013 年 1 月 26 日（土）15:15～17:15(質疑応答含)
場所	コクヨホール
講師、発表者	コーディネーター：山中淳至 （原子力・放射線） パネリスト： 技術士 伊藤友加里（原子力・放射線）、太田道宏（情報工学） 修習技術者 松田みゆき（繊維）、本多秀行（農業/JABEE）
担当者： （○印：リーダ）	山中淳至
参加者数	約290名（参加申込者数）

１．背景・目的

修習委員会が主催する第一次試験合格者・JABEE 修了見込者ガイダンスにおいて、本年もパネルディスカッションのコーナーを青年委員会にて担当した。一次試験合格者の一層の会員拡大を目指し、ディスカションを企画する側として次のようなコンセプトのもとに実施した。

1) 参加者（2 次試験突破を目指す者）にとって有益な情報を提供し、二次試験受験に向けて背中を押す。
2) 参加者に主催側が期待している技術士会へ入会したいという気持ちを持たせられるか。

この点を踏まえ、本年も昨年同様、前半部を技術士からの合格体験記として独立させた形とし、後半部を修習技術者からの「相談」に技術士が「アドバイス」するという視点でディスカッションの流れを構成し進行することとした。

２．　内容

タイトル：「技術士を目指そう」～それぞれの立場で挑戦～

テーマ1「合格体験記」：

技術士の二人に、二次試験合格者体験談として、合格までの取り組みやモチベーションの維持、苦労話を発表してもらう。

テーマ2「技術士を目指して」：

修習技術者に、これから二次試験を目指すものとして、現在の取り組みや心配事などを発表してもらう。その後、技術士の二人に、発表した内容に関する取り組みや心配事などについてアドバイスしてもらう。

テーマ3「日本技術士会との関わりとメリット」：

技術士会に入会したいきさつや、それを2次試験にどう生かしたかなど、各自の日本技術士会との関わりとそこから得られるメリットについて質問形式でディスカッションを行う。

テーマ4「技術士として」：

技術士の二人から、取得した「技術士」の資格は自分にとってどんなものであったか、思いを語ってもらう。また、名刺に「技術士」と入れた時の自己意識の変化や、各自の職場や職務でどう生かしているかなどを紹介してもらう。

テーマ5「それぞれの道」：

どのような技術士になりたいか、パネリストそれぞれにもう一度思いを語ってもらう。

３．　成果と所感

本年のパネルディスカッションは、昨年に倣い、壇上のパネリストに参加者自身を重ね合わせてもらい、技術士から参加者自らがアドバイスを受けているように有益な情報を提供すると共に、技術士の人間像を見てもらいたいということを考えていた。終了後の交流会等でも感想を聞くと、非常に参考になったという他に技術士会に対して持っていた自分の印象（敷居が高そうなど）と違っていたと言ってくれる人がおり、目的は達成できたと思っている。

事前準備はほとんどメールでのやり取りであったが、できるだけ詳細にこちらの意図やパネルディスカッションの狙いを説明するよう心掛け、関係者全員で共通意識を持てるようにした。また、当日の事前ミーティング、ランチミーティングでそれぞれの人となりを知ることが出来、より細かい意識の刷り併せを行うことができ、コーディネーター

とパネリスト、また、パネリスト間、修習委員会側との情報伝達も上手くいき、全体としても上手くいったと考えている。
今回は、「技術士からのアドバイス」というコンセプトのとおり、技術士の二人には話をしてもらう項目や時間が多く、成功したのはこの二人によるところが大きい。参加者からも「面白さ」と「情熱」が伝わったとの感想が多く、いろいろと準備に苦労して頂いた、技術士の二人に感謝申し上げたい。
また、修習技術者の2人も、自分と自分の持つ技術士像とを比較しながら、それによって出てくる悩みを語っていただき、参加者もこの二人と自分をリンクさせながら聴くことが出来たと考える。二人のように高い目標を持ちつつ、冷静に自己分析を行っており、技術士になるのも時間の問題ではないだろうか。

4． 今後の展開

パネルディスカッションの後、青年委員会有志にて合格者を含めた交流会を実施した。参加者の多くは若く、この日のために地方から参加している方も多数いた。交流会で話していると、皆、志が高く、技術士会へ入会し、青年の行事にも参加してくれそうな勢いであったが、この熱を維持させるため、我々としても刺激を与え続ける必要があると考える。
また、今回の反省と次回への課題は次のとおり。

① パネリストの数は4 名くらいがちょうどよい（3 名では少なく、5 名ではハンドリングが難しい）。コーディネーターからパネリストへの質問は多めに用意し、時間とパネリストからの回答を踏まえながら取捨選択すればよいと考える。
② 会場からの質問は前半2 名、最後に4 名受けることが出来た。2 時間の討論時間に対し、前後の挨拶や会場からの質問を考慮すると、ディスカッションそのものは実質1 時間40 分程度。その中で発表と5 つのテーマで質疑応答を進めていくのは事前に質問内容とその答えを整理した上で望む必要がある。
③ 会場からの質問は主に技術士の取得理由と取得してよかったことであった。パネリストの発表やコーディネーターからの質問にも似たような話はしているが、この点については参加者のニーズにマッチするように色々なケースで紹介してもよいと考える。
④ コーディネーターからの質問がほとんどであり、パネリストとの並びがほぼ横一列であったため、会場を横に見ながら話すこととなった。なるべく、会場を見るように心がけてはいたが、可能であれば、パネリストと会場が見渡せるような位置にした方がいいと考える。
⑤ パネルディスカッションの最後にパネリストから一言お願いする際、「最後に」と言い出すと参加者が一斉に資料を片づけ始める状況になってしまった。言葉をうまく選ばないと参加者の思考が止まってしまう可能性があるので注意したい。
⑥ 前回の報告書の反省点を参考に、はじめにパネリスト及びテーマをスクリーンに表示しながら参加者に紹介すると共に、ディスカッション中もそのテーマを表示した。参加者に配布されるプログラムにはテーマは記載されていなかったので、何についてディスカッションしているのかはスクリーン等で明確に表示しておいたほうがよい。

以 上

演壇

パネリスト

会場風景①

会場風景②

伊藤さん

太田さん

松田さん

本多さん

会場からの質問

パネルディスカッション関係者

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:　2013 年 3 月 23 日

行事名	2 月例会:「コミュニケーション力のアップを目指して、コーチングを体験しよう」
日時	2013 年 2 月 16 日
場所	葺手第二ビル 5 階　日本技術士会 CD 会議室
講師、発表者	講師:田中建夫氏(技術士　機械部門、総合技術監理部門) (財)生涯学習開発財団　認定コーチ
担当者: (○印:リーダ)	○藤井佳直(記)、山中淳至、片桐勝広
参加者数	22名

1．背景・目的

前回、千葉で開催したコーチングの例会が好評であったこともあり、認定コーチの田中氏に今回も講演をお願いした。また、今回の例会では普段の例会のように講演を聞く形式から、受講者自身がコーチングを体験し、学んでいただくことを目的として 2 月の例会として開催することにした。

2．例会内容

2．1．「コーチング」について

・「コーチング」とは何か

説明していただいた内容では、「コーチング」する相手(クライアント)に対してどのような対応をするか(コーチングの構造)、相手(クライアント)にどのような効果を与えるか(コーチングの目的)、そのためのスキルには、何が必要か(コーチングスキル)を説明していただいた。

・2 人 1 組で聴くトレーニング

「コーチング」では相手(クライアント)の話を聴くことが大事であるため、2 人 1 組で聴くトレーニングを実施した。

受講者が、2 人 1 組になり良い聴き方と悪い聴き方を実践した。受講者には、それぞれを体験していただき、良い聴き方と悪い聴き方についての感想を応えていただいて、聴くためのスキルを学んだ。

・2 人 1 組で質問のトレーニング

良い聴き方を学んで、次に聴くための質問の方法を 2 人 1 組で実践した。質問では、Why を使わずに注意をしながら実践した。Why を使わない理由としては、相手(クライアント)に対して、責任追及の質問となり相手(クライアント)を否定することになるため、コーチングでは使われないためだ。

質問トレーニングでは、2 パターンの質問例を受講者に体験していただいた。

・セッションのトレーニング

コーチングの基本である聴くこと、質問することを受講者に体験して学んでいただいたあとは、3 人1組で「コーチ」役、「クライアント」役、「オブザーバ」役にわかれて、3 回のセッショントレーニングを実践した。受講者は、それぞれの役になってコーチングを体験し、チームごとで体験した感想を話し合い、理解を深めた。

＜Q&A＞

Q:コーチングをするためには、経験が必要ですか？また、年齢差は、ありますか？

A:コーチングは、人の話を聴くことにあるため必ずしも経験が必要なものでもなく、若いから、老いているからといってコーチングに向き不向きはない。コーチングは、誰にでもできる。

Q:相手(クライアント)を自発的に行動させるには、どのようにすればよいか？

A:難しい質問ではなく、非常に簡単な質問はからはじめる。たとえば、ある目的を完了した場合のことを前提として、完了したら何がしたいか？と相手(クライアント)に目的を達成したことを意識させる質問を行うことや、完了するまでに何ができるか？そのプロセスを小さな単位のプロセスに分けて完了させるにはどうするか？などと言った感じで行動を完了させる質問をしていく。

３．成果と所感

・今回の例会では、「受講する」ではなく「体験する」を目的としていた。今までの技術士会にはあまりない形式の例会だったため、受講者の方の希望に合うか不安ではあった。結果としては、受講者の方の多くがコーチングを体験できる例会だったため良かったと言っていただけて、良かったと感じた。

４．今後の展開

・体験する例会は、予想以上に評価が高かった印象にあるため、今後もこのような体験型の例会を入れていくことは、有効であると感じた。ただし、メモをとる人が多いため、メモをとれるような配慮が必要である。

・今回の例会の参加者の中では、テーマに興味があって参加した方が多かったため、受講者が興味のわくテーマを選定していけるようにしたい。

以上

5. 写真

講演者：田中氏挨拶

「傾聴」と「質問」の体験

「コーチング」の体験

質疑応答

以上

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2013 年 3 月 20 日

行事名	テクノツーリズム:地質と日本酒の関係
日時	2013 年 3 月 16 日(土)12:30 - 17:00
場所	技術士センタービル/朱鷺メッセ ウェーブマーケット
講師、発表者	講師:江川 千洋氏 (技術士/応用理学部門、キタック)、佐藤 一博 氏 (キタック)
担当者: (○印:リーダ)	(統括本部)武井 遼、山中 淳至、昆野 哲也、松田 みゆき(記)
参加者数	22名

1．背景・目的

統括本部と北陸本部とのサッカー合同練習会の前日に、テクノツーリズムとして講演会と現地見学会(にいがた酒の陣 2013)を行った。 2011 年は東日本大震災により開催が延期となり、2012 年に続いて 2 回目の開催。酒処である新潟県での開催ということもあり、北陸本部の企画によって、講演会と見学会の内容は日本酒に関係したもので構成されている。今回、関東からは 10 名の参加者が集まった。

2．例会内容

2．1．講演会：地質と日本酒の関係　12：30～14：00／技術士センタービル

2.1.1　地質と日本酒　講師:キタック 江川 千洋 (技術士/応用理学部門)

日本酒の成分は、米と麹と水が主な原料であり、その中でも水は全体の 80%を占めている。水源は伏流水や地下水などの井戸水によるものであるが、その土地の地質により水質も異なる。講演では日本の水質の特長及び新潟の地質の成り立ちと水質との関連について紹介されると共に、各酒蔵が用いる仕込み水に焦点を当て、水の硬度、水源及び水源域の代表地質などが、酒の味に如何に影響するかについて、試飲によって味の違いを確かめた。

2.2.2　日本酒と料理　講師:キタック 佐藤 一博

日本酒には大きく分けて 4 つのタイプがあり、薫酒(大吟醸/吟醸)、熟酒(貴醸)、爽酒(生酒)、醇酒(純米)に分けられる。タイプ別に相性の良い料理の紹介と、最後に、日本酒と料理の調和の一例として、日本酒と梅干しの組み合わせで相乗効果が得られることを試飲によって確かめた。

2．2．見学会：にいがた酒の陣 2013 15：00～17：00／朱鷺メッセ

講演会終了後、ウオーターシャトル(水上バス)で会場まで移動。地元の食と地酒を楽しむことをコンセプトに、新潟県酒造組合の 50 周年を記念して 2004 年から毎年開催され、今年で 10 年目を迎えた。回を重ねる毎に来場者が増加し、今年の入場者数は 2 日間で 86,000 人を超える人気のイベントになっている。日本酒離れが叫ばれる中、女性や日本酒の苦手な人向けに、アルコール度数の低めのものや、紅麹を使ったお酒、果物リキュールなど、今までのイメージを変える新しいタイプの日本酒も多く出展されていた。

2．3．交流会：17：00～20：00／ホテル日航セリーナ

見学会後、同会場に併設するホテル日航にて交流会が行われた。3 月ということもあり、4 月に異動される方の壮行会も兼ねて行われた。

3．成果と所感

日本酒の市場規模が減少している中、にいがた酒の陣では大きな賑わいを見せ、また、日本酒をカクテルとして形を変化させているものが多いのが印象的であった。従来の形から変化し、新たな市場を見出そうとしている様は、現在の産業全体を映し出しているように思えた。今回のイベントは日本酒をアピールし、盛り上げるという意味も含まれていると思うが、北陸本部との交流もまた、同じようにツーリズムを通じて技術士会を盛り上げたのではないかと思う。「盛り上げる」ということをキーワードに今後の例会も生かしていこうと思う。

以上

■テクノツーリズム 写真

料理から日本酒を考える
相性の良い料理と酒の基本的な考え方
味の濃い料理には「濃醇タイプ」の酒
旨味の強い料理には「濃醇タイプ」の酒

にいがた
酒の陣
酒
酒

上善如水

清酒
菊水

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2013 年 4 月 27 日

行事名	3 月例会:ディベートを体験しよう！
日時	2013 年 3 月 23 日　13:30～17:30
場所	葺手第二ビル 5F 会議室 A,B
講師、発表者	説明:太田委員補佐　ディベート参加者:10 名　評価者:3 名
担当者: （○印:リーダ）	○太田　道宏、横田　幸利、石井　利教
参加者数	23名（内委員　10名）

１．背景・目的

問題の争点を明らかにし、論理的に比較検証するスキルとして、ディベートに注目が集まっている。今の技術者には必携のスキルと言えるが、体験できる機会はそう多くない。初心者にも基本的なディベートを体験してもらい、技術者としてのスキルアップに役立ていけることを目的として企画した。なお、2011 年 6 月例会「エネルギー問題についてディベートしてみよう」の実績、成果を踏まえ、本企画の準備を実施した。

２．例会内容

1) テーマ:「公共事業は削減すべきか」の提示

テーマは事前に告知し、資料持参を依頼した。資料は当日コピーし、両チームに配布した。

2) 選手、評価者、タイムキーパー、オブザーバーの選出および役割定義

選手（肯定側、否定側を各 4 名選出。2 回目実施時に 1 名入れ替わり）:

杉浦さん（機械）、田中さん（応用理学・総監）、高柳さん（電気電子）、土手さん（建設・上下水道）、細野さん（機械・修習）、本田さん（情報工学・総監）、安力川さん（電気電子・情報工学）、山崎さん（電気電子）、山本さん（電気電子）

評価者（ディベート採点票に従い、ディベートの採点および講評）:

嶌田委員、石井委員、田中委員

タイムキーパー（ディベート実施時の時間周知。1 分前および定刻に呼び鈴）:

横田委員

オブザーバー（選手間のコミュニケーションの活性化および進行状況の監視）:

山本委員、品田委員

3) ルール説明

司会（太田委員補佐）からディベートの基本ルールと注意事項の説明を実施

4) ディベートの実施

ディベートはチーム（同じ選手の組み合わせ）で 2 回行った。2 回目は肯定側、否定側を入れ替えて実施した。肯定側、否定側でディベートの戦略を練った後（30 分）、基本的な進行に沿って、「肯定側立論（5 分）」「反対尋問（4 分）」「否定側立論(5 分)」「反対尋問（4 分）」「否定側反駁（3 分）」「肯定側反駁（3 分）」「否定側結論（3 分）」「肯定側結論（3 分）」の各時間を厳密に計って進めた。

1 回目の選手感想で反対尋問、反駁、結論には相談時間が必要との意見が出たため、2 回目では各々1 分間、相談時間も含めて時間を延長することとした。また、評価者に対するアピールの意識を出すため、2 回目は肯定側、否定側の席の配置を「コの字」から「ハの字」に変更した。

1 回目の実施後、選手から「費用の削減」に論点を絞った方が、議論が噛み合いやすいとの指摘があり、2 回目は「公共事業費は削減すべきか」と論点を絞って実施した。

5) 判定

1 回目は評価者のみが講評し、2 回目は評価者だけでなく見学者からも講評、感想を頂いた。講評の後、選手以外の全員がジェスチャー（肯定側勝利は○、否定側勝利は×を手で示す）で判定を行った。数値化してはいないものの、1 回目、2 回目とも僅差であるが肯定側がやや説得力が勝った（○の数が多かった）という判定であった。

6) 実施しての感想

選手、見学者を含め全員から実施の感想を頂いた。

・ディベートのやり方が判り勉強になったという意見が多かった。

・より説得力を持たせるためにはデータを揃えることがより重要であるという意見があった。
・1 回目と 2 回目で肯定側、否定側の立場が入れ替わったため、頭の整理が難しかったとの意見があった。
・スピーチの最初と最後の印象が強いため、立論、結論を特に力を入れて行うのが良いという意見があった。
・1 回目より 2 回目の方がよりディベートとして完成度が増しており、体験することで習熟度が増したのではないかとの意見があった。

３．成果と所感

・ディベートを体験することを主目的としたため、テーマ選定が難しかった。個人の経験や専門性に依存せず、なるべく技術志向かつ俗世的でないテーマの一つとして公共事業削減の是非を選定した。個人の立場によってはデリケートな話となってしまい得るが、ディベートは個人の意見の表明の場ではないことを参加者に十分説明したため、特に問題なく進行できたと思う。
・参考資料の持参をお願いしていたが、当日持参いただいた資料の多さに驚いた。準備中、参加者に事前準備をお願いすることは難しいと想定していた。政権交代から日も浅く、比較的関心の高い話題であったことと、専門性が高くなくても、資料が揃えやすいデータであったことが資料を持参して頂けた要因と思われる。参考資料の有無でディベートの質が大きく変わるため、テーマ選定では資料の揃えやすさも考慮した方がよい。
・メンバーを固定し、肯定側、否定側を入れ替えて同じテーマで 2 回ディベートを実施した。絶対的な体験者が少なくなること、また進行時間にゆとりが無くなるなど不安要素があったが、実施に際して概ね好評であった。体験希望者数によっては実現できないことであるが、肯定側、否定側の両側を体験する機会は稀であるため、その提供の場としては有用であったと思う。
・反対尋問（質問と回答）、反駁（立論に対する否定）のターンにて、発言が噛み合わない場面があった（自チームの主張をしてしまう等）。各ターンの交代時に、改めてそれぞれの主旨を説明するなど対策を行ったが、一部の選手は混乱していたように思う。基本説明の際に、ロールプレイなどでより具体的な説明が必要であったかもしれない。
・基本の説明の資料は 2011 年に作成されたものに追記する形で準備した。内容が分かりやすいため、次回同様の企画を行う場合、今回の資料は有用と考える。

４．今後の展開

・様々な側面から物事を見る事は技術士、技術者にとって不可欠の素養であるが、今回実施したディベートが一助となることを確認した。
・参加者からの評価も総じて高く、体験型の例会として、今後継続して実施する価値があると考える。

文責　太田　道宏

太田委員補佐によるディベートの基本説明

肯定側、否定側分かれて作戦会議

1 回目肯定側チーム立論

1 回目否定側チーム立論

2 回目否定側チームの反駁

嶌田委員、石井委員、田中委員による審査・講評

1 回目ディベート座席配置（コの字）

2 回目ディベート座席配置（ハの字）

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2013 年 5 月 25 日

行事名	4 月特別例会(青年技術士展 2013　一次・二次試験合格者交流会)
日時	2013　年 4　月 27 日(土)
場所	第一部:田中山ビル 9F　会議室、 第二部:葺手第二ビル 5F　日本技術士会会議室 A, B
講師、発表者	○開会あいさつ・司会…松田委員補佐 ◯青年委員会紹介…山本委員、昆野委員補佐(国際交流)、藤井委員補佐(サッカー/フットサル) ◯イベント内容説明…田中委員 ○閉会あいさつ…武井委員長 ○交流会司会…中村委員
担当者: (○印:リーダ)	中村委員、品田委員、山本委員、松田委員補佐、○田中委員(記)
参加者数	第一部:参加者同士によるインタビュー、グループワーク　合計73名(一般53名、委員20名) 第二部:交流会　合計77名(一般52名、部会等9名、委員16名)

1．背景・目的

これまで('09～'12)に引き続き、本年も一次・二次試験合格者の歓迎会を実施した。この度は行事名を「交流会」と銘打ち、目的としては参加者同士の交流に重点を置き、具体的には以下の 2 点を掲げた。①参加者にとって、今後の活動基盤となる技術士会において自分の所属部門にとらわれない出会い(横のつながり)と、先輩技術士からJABEE出身者にいたるまで世代を越えた縦のつながりを得ることができ、そしてそれらを持続できるようなイベントとする。②青年委員会としては、日本技術士会および、青年技術士の活動内容をより多くの方に理解いただき、参加者に青年技術士の活動にも興味を持っていただく。

2．例会内容

本イベントは二部構成とした。第一部では、日本技術士会の活動内容を理解いただく目的で、青年委員会の紹介(含む国際交流活動、サッカー/フットサル活動)を実施した。続いて全員参加型のイベントとして、参加者同士でインタビューを行い合う「インタビュータイム」と、「ある技術を参加者の皆さんで開発するとすればどうするか」をテーマにグループワークを行った。参加型イベントでは参加者ができるだけ多くの人と交流が取れるよう、インタビュータイムとグループワークでメンバーが重複しないようグループ分けを行った。第二部では、参加者間で世代や部門を超えた縦と横のつながりを有機的におこなえるよう、立食パーティー形式の交流会を行った。全体の詳細を以下に示す。

第一部 13:30～17:30

2．1　開会のあいさつ　(松田委員補佐)　13:30～13:35

合格お祝いのメッセージから始まり、タイムスケジュール、イベントの注意事項、ネックストラップ紐の色分けの理由などを説明いただいた。こちらでネックストラップ紐の色について説明したおかげで、参加者は声掛けをやりやすくなったのではないだろうか。発表資料も大変きれいで鮮やかであり、合格者を迎えるのに相応しいものとなっていた。

2．2　青年委員会の紹介(山本委員)　13:40～13:40

まず、青年委員会の紹介の前に、参加者に対してこれからの目標や動機などの心構えについて激励をいただいた。このことは、参加者へのすばらしいメッセージになるだけではなく、参加者の積極的な姿勢が必要である今回の交流会を成功に導くための重要な役割を果たしていた。山本委員のメッセージは質問形式になっており、参加者に自ら考えさせることでより効果が出ていたように思える。

続く青年委員会の紹介については、日本技術士会の中での青年委員会の定義、構成、位置づけ、活動内容について一つ一つ丁寧に説明をされた。終始全体が今回の主テーマである「交流」と結びつけて説明されており、主体的な交流をはかれるよう参加者を鼓舞できていた。

2．3　国際交流活動の紹介(昆野委員補佐)　13:45～13:50

国際交流活動について、昨年、昆野委員補佐が参加した YEAFEO、日韓技術士会議、そして二国間交流について紹介いただいた。写真やアニメーションが存分に使われており臨場感のある紹介となっていた。まずは日韓技

術士会議のサッカーからでもお気軽に！というメッセージで次のサッカー/フットサル活動の紹介にうまくつながっていた。

２．４ サッカー/フットサル活動の紹介（藤井委員補佐） 13:50～13:55

サッカー/フットサル活動について、活動の経緯、目的、内容、今後の活動などについて紹介いただいた。こちらも写真が存分に使われており、活動の楽しさや意義が参加者へ十分に伝わっていたように思える。青年委員会への興味を持っていただくひとつのきっかけとして十分に機能していた。

結果：

それぞれの説明に対し、参加者のみなさんは頷きのリアクションをくれたり、積極的にメモしたりなど、主体的に情報を収集しようとする姿勢を見せてくださった。青年委員会の紹介が十分にできたと感じる。

発表者のみなさんはよく練習されていたようであり、きちんと時間以内に発表をいただいた。発表自体はとても良かったが、スライドを予め開いておかなかったために交代に手間取ってしまったことと、次回の例会についての紹介ができなかったことなど段取りの部分で反省点が残った。

２．５ インタビュータイム 13:50～14:50

参加者を受付時に配布した飴の種類により 7 チーム(8 人/チーム)に分け、グループ内で総当たりによってお互いにインタビューを行うインタビュータイムを実施した。目的は交流に加え、自己紹介や自己 PR の練習である。

インタビューを行った内容は、「仕事・スキル」「資格」「今後の抱負・夢」「その他」である。インタビュー内容をメモするためのインタビューシートを用意し、インタビューはひと組4分×7回＝28 分で行った。インタビューのペアリングの方法としては、座っている席により参加者のナンバリングをし、予めこちらで用意したペアリング順により行うというものである。

結果：

約 30 分をノンストップでインタビューをし続けるという、参加者にとっては負荷の大きいであろう企画であったが、それが功を奏したか参加者のテンションが上がり、後々のイベントにまで良い影響を与えた。選んだ飴の種類によりグループ分けを行ったもの良かったようで、当初からグループ内で仲間意識が芽生えていたようにも思える。また、インタビュー内容の「今後の抱負・夢」は青年委員会の紹介部分で山本委員が発信したメッセージに関連付けて加えた項目であり、参加者にとってよい刺激になったのではないかと感じる。

当初の懸念としては、ペアリングがうまくいくか心配であったが、予め参加者にナンバリングをしペアリングの順番を決めておき、そして、その順番をインタビューシートやスライドに表示していたおかけで、スムーズなペアリングが行えた。ペアリングチェンジのアナウンスについては、今何回目のペアリングなのかを松田委員補佐にメモをしてもらっていたおかけで問題なく行うことができた。メモを取っていなかったら何回目かわからなくなっていた可能性が高い。また、1グループ8人で行うことが必須の企画であったが、人数変動対策の青年委員の補てんや席を離れる場合はお知らせくれるよう注意を促していたおかげで、全グループ8人で実施することができ、問題は発生しなかった。

２．６ グループワーク「鉄腕アトム開発会議」 14:55～17:30

参加者を A～H の 8 チーム(7 人/チーム)に分け、参加者のみなさんが鉄腕アトムを開発するならどうするかをテーマに議論を行った。目的としては、実際にアトムを作ることではなく、参加者にどういう人がいるかなどの印象を残してもらうことであり情報交換が主な目的である。

より具体的なグループワークの内容としては、「七つの威力」と呼ばれる鉄腕アトムの基本仕様について、「課題の抽出」、「問題の解決方法」の議論を行った。このとき基本ルールとして、問題解決のために使える技術は参加者が保有している技術のみとすることで、目的の達成を図った。さらに、インタビュータイムでインタビューを行った人の技術も使うことができるというルールを追加することで目的達成を促進させた。

グループワーク後は各グループの成果発表を行った。発表の際に、技術提供者として名前の挙がった人には挙手をしていただくようにした。

結果：

まず、グループワークのグループ分けについて、インタビュータイム時のメンバーと誰一人として重複することがなく分けられており、各人がインタビュータイムでて得た情報により各グループが参加者全員分の情報をもつことにな

るというタネあかしをしたとき感嘆の声が漏れていた。企画としてよく練られている感が出ており参加者にも好評をいただけた。実際、参加者ひとりは7+6の最低13人と交流を持てたことになるので交流会としての目的に貢献できるものになったと自負している。

グループワークの開始後は、インタビュータイムでエンジンがかかっていたためか、開始直後から活発な意見交換がなされていたように思える。また全員にペンと付箋を配布したのも、議論活性化に貢献したように思える。参加者はこちらの意図通りに議論をしていただけたようで、参加者自身も企画を大変楽しんでいるようだった。

第二部：交流会（18:10～20:00）

開会あいさつ・乾杯　中村委員

閉会の挨拶　田中幹事長

３．所感

- GW 初日にも関わらず、一般参加者は 59 名であり、平均年齢も 38 歳と低い上に、多くの部門からの参加者をいただいた。結果として会員の増大に貢献できるものと確信する。
- イベントの活性化には、参加者側にいかに主体的な取組みをさせるかが重要である。これについては、まずインタビュータイムにおいて強制的に発言と交流と促しエンジンをかけたことで、グループワークでの議論は大いに盛り上り、第二部の交流会においても参加者の表情が終始高揚していたように思える。今回のインタビュータイムのように短時間で何度も強制的に発言させるような企画は、イベント全体の前菜として有効であると感じた。
- 今回から「歓迎会」の冠を外し、「交流会」と銘打っており、企画の内容も交流に特化したものに練り上げた。結果、交流会としては前年の「部会説明＋ディスカッション」という形がひとつの完成形に思えていたが、またひとつ新たな交流会の手法を確立できたと自負する。
- 全体を通してみると、綿密な準備が会の成功を握ると感じた。Facebook、メール、対面の会議をうまく使い分け、幹事間で密に意見交換ができていたのが良かった。また、企画内容を青年委員で実際に体現していると、参加者の理解がより促進されるように感じた。
- 第二部の出席未確認者への最終チェックは手間がかかったが、一人一人にメール確認することで結果的に事前に名前がつながり、当日参加者への声掛け等がしやすかった。
- 第二部では当初参加するつもりのなかった方々からの参加をたくさんいただき、たいへん嬉しかった。第二部も終始盛り上がっていた。

４．その他

今回の結果より参加者のポテンシャルの高さを感じ取れた。今後は技術士会での活動を経験することでネットワークの有用性が理解いただけるものと信じる。今後技術士会のイベント等で再会した時は活動の中でバックアップしていく。

最後になりましたが、技術士会事務局並びに各部会のご支援とご協力により、トラブルなく終えることができ、また充実した内容になりましたことを深くお礼申し上げます。

以上

受付と案内係

松田委員補佐による開会のあいさつ

山本委員による青年委員会の紹介

昆野委員補佐による国際交流活動の紹介

藤井委員補佐によるサッカー/フットサル活動の紹介

インタビュータイム説明時の様子

インタビュータイムの様子①

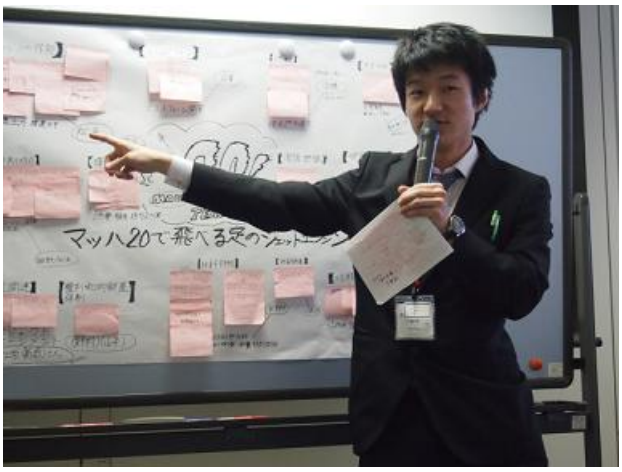
インタビュータイムの様子②

グループワーク説明時の様子

グループワークの様子①

グループワークの様子②

グループワークの様子③



参加者によるグループワーク成果発表

自称優勝Ｈ班のメンバー

田中委員によるグループワークの所感

武井委員長による閉会のあいさつ

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2012 年 5 月 26 日

行事名	フットサル練習会
日時	平成 24 年 5 月 12 日(土)16 時 00 分～18 時 00 分
場所	横浜みなとみらいスポーツパーク
担当者: (〇印:リーダ)	〇山中　淳至、山崎　浩司、藤井　佳直
参加者数	24名

1. 背景・目的

2008 年新潟で開催される日韓親善サッカー大会での勝利を目指して立ち上げられた「フットサル愛好会（2007 年 12 月)」では、参加メンバーを増やしながらサッカーを通じた交流の輪を広げ、現在まで継続した活動を行っている。今回は 8 月に行われる新潟本部との合同練習会を前に、本部フットサルメンバーの技術向上を目的とした定例の練習会を実施した。

2. 内容

当日は、晴天であり若干気温が高かったが、開始時間が 16 時からということもあり、フットサルにはよい気候であった。今回の新規参加者は4名、また途中から参加者のご家族もゲームに参加した。

今回は従来の練習会のようにチームに分かれすぐに終了時間までゲームを続けていく形式ではなく、最初の 30 分をかねてから要望のあった基礎練習(パス交換、シュート練習)にあて、その後 3 チームに分かれたゲームを行う形式とした。慣れない練習と30分間休み無く続けたためか、練習で疲れてしまった人もいたが、怪我人も出ることなく、充実した練習を行うことができた。今回の MVP は、攻守共に献身的に動いていた伊藤さんが選ばれた。

練習終了後は参加者のほぼ全員が横浜駅に移動し、交流会を行い、今日の練習の反省や日韓サッカーについて話あった。

3. 成果と所感

- 今回、はじめて基礎練習を行った。この様な練習をしたことがない参加者の方が多かったので、もう少し丁寧に指導していきたい。
- 長く一緒にプレーしているメンバーはかなりお互いのプレーを分かった上でゲームをしていることが感じられ、徐々に連携が取れてきているように見える。
- 少しずつ家族同伴の参加者も増加すると共に、一緒にプレーする方も出てきた。このような活動には家族の理解も必要であり、一緒に楽しめる場となればよりよい雰囲気となって進めていくことができる。
- 2 時間の間で、練習＆ゲームは若干時間が足りない気もしたので、できれば 3 時間取れるとさらに充実した内容になると思った。
- 今回の練習から、練習をする目的を明確にすること、楽しみながら練習できるメニューを工夫するなど改善する点もあると感じた。また、意外とルールについてはっきりと知らない人が多いことに気がついた。(フットサルのボールがサッカーのボールより小さく、重いことなど)

4. 今後の展開

- 未経験者にとっての基礎練習は有効だが、簡単に身につくものではないので、30 分という短い時間でも継続して実施していく予定。
- 活動の継続、新メンバーの勧誘の成果もあって、コンスタントに 20 名程度の参加者が集まるようになった。今回も初参加の方もおり、今後はフットサルよりも広いコートで開催することも必要になると思われる。
- 次回のフットサル練習会は 7 月 15 日(日)、北陸本部との合同練習会は 8 月下旬を計画している。
- いずれは女子チームができるとさらに参加者も増えるのではないかと思う。

5. 写真

基礎練習 1

基礎練習 2

練習試合 1

練習試合 2

集合写真

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2012 年 8 月 18 日

行事名	フットサル練習会
日時	平成 24 年 7 月 15 日(日)16 時 00 分～18 時 00 分
場所	横浜みなとみらいスポーツパーク
担当者: (○印:リーダ)	○山中　淳至、山崎　浩司、藤井　佳直
参加者数	23名

1．背景・目的

2008 年新潟で開催される日韓親善サッカー大会での勝利を目指して立ち上げられた「フットサル愛好会(2007 年 12 月)」では、参加メンバーを増やしながらサッカーを通じた交流の輪を広げ、現在まで継続した活動を行っている。今回は 9 月に行われる中部、北陸本部との合同練習会及び 10 月に行われる日韓サッカー大会を前に、本部フットサルメンバーの技術向上を目的とした定例の練習会を実施した。

2．内容

当日は、晴天であったが、開始時間が 16 時からということもあり、フットサルにはよい気候であった。今回の新規参加者は4名、宮城や長野からの参加者もいた。

前回より練習会の内容を、練習 30 分＋ゲーム 1 時間 30 分として行うこととし、基礎練習にあて、その後 3 チームに分かれたゲームを行う形式とした。ゲームでは日韓サッカーに出場予定の参加者を 1 つのチームとし、残りを 2 チームに分けて実施した。今回は 1 チームあたりの人数も多く、効率よく休みながらゲームをこなすことができた。

今回の MVP は、攻守共に献身的に動いていた斉藤さんが選ばれた。

練習終了後は参加者のほぼ全員が横浜駅に移動し、交流会を行った。

3．成果と所感

- 毎回数名ではあるが、新しい参加者もあり、固定メンバーも増えてきている。フットサルコートを 2 面利用の検討も視野に入れる必要がある。
- 長く一緒にプレーしているメンバーはかなりお互いのプレーを分かった上でゲームをしていることが感じられ、徐々に連携が取れてきているように見える。
- 今回の練習会では、基本的なパスについてはほぼできていた。フットサルのような小さなコートでの連携は、ほぼミスなくできているように感じられた。本番ではサッカーのため、フットサルのように止まってパスを受けるだけでは、つながらない。そのため、動きながらパスを受けることができるかが今後の課題になると思う。

4．今後の展開

- 今回も 20 名以上の参加者となった。参加動機は青年委員会の活動への直接的な興味ではないが、これがきっかけになればと思う。
- サッカー経験者や現在チームに所属しプレーしている参加者もいた。関係者チームとの試合や交流なども視野に入れ、より幅広い活動としたい。
- 3 連休ということもあり、地方在住の方は前日の CPD 講座とフットサル練習会をセットにして参加されていた。例会、フットサル共に 1 日のみだと参加しにくいということから、今後は例会の前後にフットサル練習会を設定するのも、より参加者のニーズに応えられるのかも知れない。
- 途中、神奈川県支部の方が見学に来られた。今後も地域本部や各支部とのつながりができることを期待する。
- 次回は名古屋で中部本部、北陸本部合同のサッカー練習会を 9 月 1 日(土)に予定している。

5. 写真

基礎練習1

基礎練習2

ゲーム1

ゲーム2

集合写真

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2012 年 9 月 29 日

行事名	サッカー合同練習会
日時	平成 24 年 9 月 1 日(土)14 時 00 分～18 時 00 分
場所	愛知県蟹江市　名古屋ウエストフットサルクラブ
担当者: (○印:リーダ)	○山中　淳至、山崎　浩司、藤井　佳直(記)
参加者数	31名(中部:10名、北陸:4名、関東:17名)

1．背景・目的

2008 年新潟で開催される日韓親善サッカー大会での勝利を目指して立ち上げられた「フットサル愛好会(2007 年 12 月)」では、参加メンバーを増やしながらサッカーを通じた交流の輪を広げ、現在まで継続した活動を行っている。今回は 10 月に行われる日韓親善サッカー大会を前に、技術向上を目的とした練習会を中部本部、新潟本部と合同で実施した。

2．内容

今回の練習会は、初めて名古屋での開催と言うこともあり、参加者がどのくらい集まるか不安ではあったものの北陸、関東から 21 名もの参加者が集まった。

当日は、夏の暑さが残る中の練習会となったが、少し曇りがかっていたこともあり予想以上に厳しい暑さではなかった。途中一時的に雨が降ることもあったが、練習会の参加者にとっては恵みの雨のように思えたのか、雨が降る中グラウンドにでてボールを追いかけることもあった。

練習では、久々に体を動かす人もいるため、十分な準備運動から動きながらのパスを取り入れた練習を実施した。パス練習では、ショートパス、ロングパスを組み合わせた練習やボールタッチ数の制限を設け、状況判断能力の向上を目指した練習を行った。

練習後の試合では、2 チームに分かれて試合を実施した。サッカー練習会であるため試合前に各チーム内でポジションを決めるのだが、普段フットサルを主にしているため少し戸惑う部分もあった。慣れないサッカーコートのため最初の試合は、距離感やポジション感覚、ボールの扱いに慣れるまで時間がかかっていたように思われた。練習会の最後には、日韓大会参加者のチームを作り試合を行った。結果は、日韓大会参加者のチームが 4 点を獲得して勝利し、とてもよい壮行試合となった。また、今回の MVP は、日韓大会参加者チームの得点源として活躍した佐藤さんが選ばれた。

練習終了後は交流会を行い、練習の反省や日韓サッカーについて話あった。

3．成果と所感

- パス練習では、フットサルの経験が長いためショートパスには全員慣れていたが、ロングパスになると慣れないせいかうまくパスを出せていなかったように思えた。
- 中部本部、新潟本部との初めての合同練習ができサッカーでの交流がますます広がっていることを実感した。
- 試合では、フットサルの感覚がなかなか抜けず、サッカーコートの広さ、ポジション取りなどサッカー独特の感覚をつかむまでに時間がかかっていた。日韓戦前にサッカーを行うことができ、感覚を取り戻す良い練習になった。

4．今後の展開

- フットサルでは、ポジションの意識やロングパス、ロングシュートの感覚をつかむことができないため、フットサルだけではなく、サッカーを含めた練習会を今後も取り入れて、フットサルでは得られないポジションを分けた練習やロングパスを意識した練習を取り入れていきたい。
- 今回の練習会では、中部本部、新潟本部との初めての合同練習ができサッカーでの交流がますます広がっていることを実感できたため、この交流会を今後も続けていけるようにしたい。
- 次回は、日韓親善サッカー大会の本番のため是非日本チームの勝利を目指したい。

5. 写真

練習前挨拶

練習風景

交流風景

練習試合

集合写真

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2013 年 1 月 19 日

行事名	サッカー合同練習会
日時	平成 24 年 12 月 8 日（土）
場所	市原スポレクパーク
担当者: （○印:リーダ）	○山中　淳至、佐藤　泰秀、藤井　佳直(記)、山崎　浩司
参加者数	31名（北陸:8名、関東:23名）

１．背景・目的

「フットサル愛好会（2007 年 12 月）」が中心となり、サッカーを通じた交流の輪を広げてきた。今回は10 月に名古屋で開催された日韓サッカー大会の慰労会も兼ねて、北陸本部とのサッカー合同練習会及びテクノツーリズム＠千葉という内容で開催した。

２．内容

２．１　北陸本部青年技術士委員会とのサッカー合同練習会

北陸本部青年技術士委員会とのサッカー合同練習会の会場は、昨年同様、千葉県市原市の市原スポレクパークで行った。練習会場の市原スポレクパークは、グランド整備が整った天然芝のフルサッカーコートがある会場で、サッカーをするには申し分のない会場である。今回グラウンドを 4 時間確保することができた。

当日の天候はものすごい強風で風下ではボールが戻ってきてしまうという状態であり、また風の影響で体感温度が相当低く感じられたが、参加者の怪我もなく、時間ギリギリまでプレーを続け、無事練習会を終えることができた。

今回の MVP は、すばらしいゴールを見せてくれた金子直樹さん（北陸本部チーム）と献身的な動きでチームを支えた野々垣智樹さん（統括本部チーム）が選ばれた。今回の MVP に満足せず今後の活躍も期待したい。

２．２　交流会

練習会終了後、場所を移し、千葉駅近くのとと幸にて交流会を実施した。巨大で美味しいマグロのカマや室内の冷蔵庫の全てのお酒が飲み放題という豪快な店内で練習会での反省会やこれからチームとしてやりたいことなどを語り合いながら交流を図った。

また、2012 年 12 月は統括本部でフットサルチームを立ち上げてからちょうど 5 周年ということで、交流会の最後に初代主将の松本正人さんから頂いたメッセージを田村 GM に代読していただくと共に、田村 GM からは立上げのキッカケや当時の思いとこれから期待することを熱く語っていただき、統括、北陸共に 2013 年の日韓戦に向けて、気持ちを新たにすることができた。

３．成果と所感

- 天然芝でのフルコートで、気持ちよく練習会ができた。サッカー経験者である若手参加者も増えつつあり、交流の幅も広く、サッカーのレベルも高くなってきている練習会となった。
- 今回は中部本部からの参加者の他、統括本部で利用している横浜のグラウンドで活動しているフットサルチームからの参加者があった。新たなつながりもできつつあり、今後も継続していきたいと考えている。
- フルコートでのサッカーをする経験が少ないことから、フィールドを広く使った試合ができずにいる。そのため、今後は日韓戦を意識してフルコートの経験値を上げられるように練習していきたい。
- サッカー経験者が多くなっていることは、チームにとって良いことだが、未経験者の方も引き続き来てもらいレベルアップしてもらえるようにするなど、交流と練習の切り分けを意識していく必要がある。

４．今後の展開

- 名古屋での敗戦はショックだったという方も多く、2013 年の韓国　水原での日韓戦に向けて、強化試合を計画している。
- 北陸本部との交流が密になり、2013 年は中部本部も含めてサッカーとともに幅広い活動としていきたい。
- 日韓戦に挑むメンバーで、練習試合を組むなど対韓国チームを意識した練習会を検討していきたい。

5. 写真

練習前準備運動

練習前挨拶

練習風景①

練習風景②

練習風景③

集合写真

青年技術士交流実行委員会　活動報告

報告日:2013 年 2 月 16 日

行事名	サッカー練習会（第 1 回サッカー交流会）
日時	平成 25 年 2 月 9 日（土）14 時 00 分～16 時 00 分
場所	横浜みなとみらいスポーツパーク
担当者: （○印:リーダ）	○山中　淳至
参加者数	参加者数　39名（交流会:18名）

1．背景・目的

「フットサル愛好会（2007 年 12 月）」では、参加メンバーを増やしながらサッカーを通じた交流の輪を広げ、現在まで継続した活動を行っている。今回は各メンバーが所属/交流のあるチームが集まり、ハーフコートのサッカー交流会を実施した。

2．内容

当日は、若干気温は低かったが、晴天で風もなく、体を動かすにはよい気候であった。今回は技術士会の他、パシフィックコンサルタント、千駄ヶ谷デュナミス、スチールプランテック、など 5 チームが集まり、かるいウォーミングアップの後、第 1 回日本技術士会 サッカー交流会と銘打ち、各チーム総当りのリーグ戦（7 分/試合）を実施した。白熱した試合の中、3 勝 1 分でペキニーズが優勝し、賞状と賞品を授与された。また、4 得点で得点王となった上田氏は合わせて MVP も獲得した。練習終了後は各チームからも数名ずつ参加して交流会を行い、各チームとも次回の参加を約束してくれた。

	技術士会	千駄ヶ谷デュナミス	PCKK	S.P.	ペキニーズ	勝	負	分	勝点	順位
技術士会		0 ● 1	0 △ 0	0 ● 1	0 ● 1	0	3	1	1	5
千駄ヶ谷デュナミス	1 ○ 0		2 ○ 0	1 △ 1	0 ● 2	2	1	1	7	2
PCKK	0 △ 0	0 ● 2		0 △ 0	0 ● 2	0	2	2	2	4
S.P.	1 ○ 0	1 △ 1	0 △ 0		0 △ 0	1	0	3	6	3
ペキニーズ	1 ○ 0	2 ○ 0	2 ○ 0	0 △ 0		3	0	1	10	1

3．成果と所感

- 今回、初めての試みとして複数のチームが集まった交流試合を行った。各チームは技術士会メンバーのつてで参加しているためか、参加者の多くが技術系の仕事をされていた。この活動を通じて新たな技術者に技術士会の活動の一部をアピールできたと考える。
- 5 チームが集まり、各々が楽しみながら汗を流すことが出来た。技術士会は今回 1 勝もできずに最下位という結果であり、他のチームと試合をすることで、日韓戦に向けて、どういう風にプレーをすべきか考えるいい機会になった。
- 今回は参加人数が多く、かつ担当者が 1 人であったため、準備から当日の運営まで非常に大変であった。人数が増えるのはいいことだが、うまく運営するためにはさらに 2 人くらいのサポートが必要であり、今後の活動方法について考える必要がある。
- チームを集めるあたりフットサルメンバーに色々とご協力いただいた、ここで感謝の意を表したい。

４．今後の展開

- 今回の企画は非常に好評であり、今後も、このような企画を行うと共に各チームから少しでもサッカー以外の技術士会の企画にも参加してもらえるように継続した交流を図っていきたい。
- 参加者の増加もあり、今回はじめて使用グラウンドをフットサルコートからハーフコートに変更し、参加者の満足度も向上したが、グラウンド使用料は前払いであり、実際に集まるまでは幹事の不安はぬぐえず、参加者確保が困難な場合は参加者に負担を強いることにもなる。そのため、今後も引き続き新たなメンバーを確保することが重要である。
- 次回は 3 月 16 日、17 日に北陸本部との合同練習会及びテクノツーリズムを実施する。

以上

5. 写真

ペキニーズ

日本技術士会

千駄ヶ谷デュナミス

スチールプランテック

集合写真

YEAFEO19 派遣報告

１．概要

報告先　公益社団法人日本技術士会　青年技術士交流実行委員会（以下、青年委員会）

報告日　2013 年 1 月 19 日

派遣者　野々垣　智樹（技術士：情報工学）

　　昆野　哲也　（技術士補：上下水道、青年委員会理事）

　　竹内　翔　（修習技術者：衛生工学）

派遣期間　　2012 年 12 月 16 日　～　19 日

会議名　CAFEO30(Conference of ASEAN Federation of Engineering Organizations)

　　YEAFEO19(Young Engineers of ASEAN Federation of Engineering Organizations)

会場　　カンボジア王国　プノンペン特別市

　　Sofitel Phnom Penh Phokeethra Hotel（国賓利用の最高級ホテル）

派遣目的

　　1.青年委員会における各国若手技術者団体との関係基盤の維持確保

　　2.青年委員会国際活動の目指すべき方向性検討情報の収集

　　3.派遣者・関係者及び国際活動に関心のある者への国際感覚の醸成

主日程　12 月 16 日　　派遣者現地集合

　　12 月 17 日　　CAFEO30/YEAFEO19　会議登録

　　CAFEO30 Working 会議

　　YEAFEO19 本会議

　　Welcome ディナー

　　12 月 18 日　　CAFEO30 本会議

　　ASEAN 各国カントリーレポート

　　12 月 19 日　　AFEO30 テクニカルセッション/ツアー

　　CAFEO30 クロージング

　　Farewell パーティ

　　12 月 20 日　　帰国

2. 活動状況

2.1　12 月 16 日

各自にて現地入り。

18 時　ホテル到着後、互いに連絡をとり、集合。現地レストランにて夕食。

19 時　個人参加者との顔合わせ。会議進行に関する情報収集を実施。

　　個人参加者宿泊部屋にて、Farewell パーティにおける日本出し物の練習実施。

2.2　12 月 17 日

17 日　8 時　会場入り。会議登録後、各国参加者との挨拶。

　　9 時　Award Meeting Group 聴講。

参加者：各国技術者団体チェアマン

議　題：各国の技術者資格認定に関する意見交換及び相互認証への取組検討。

10 時　YEAFEO 本会議。

-議事

1.開催宣言

2.各国代表者自己紹介

日本からは野々垣、昆野、竹内、園屋（個人参加）が実施した。

3.前回ブルネイ大会の議事録確認(資料 1)

特筆すべき事項なし。

4.議案協議

(1)ウェブサイト

YEAFEO ウェブサイトを立ち上げるため、各国からの情報提示を求めていたが、報告国が1件もなかったため、未実施であった。過去の経緯から、担当者変更によりウェブサイトの運用が困難となるため、情報共有はメールがよいとの提言があった。なお、紙による出席者リストを回覧したが、メール記入欄が明示されていなかったため、メールアドレス収集も未実施となった。 結果、Facebook による運用が容易とのこととなり、現在の YEAFEO グループを運営・管理することとした。

(2)各国の技術者会員確保状況

マレーシアによる AERYE(ASEAN Engineers Register for Young Engineers)の 5000 名獲得に関する質疑・情報共有があった。各国会員獲得に苦慮しており、その工夫が共有された。マレーシアによると、大学における出張講義実施時に登録するだけであれば無料としたことが効果的であったとのこと。しかし、資格が実効的となる登録証明証は USD20 必要とのこと。

(3)インターン

各国のインターン条件を共有した。しかし実現するにはスポンサーを見つけることが困難であろうとの見通しがなされた。日本の意見として、各国からインターン訪問の要望があれば受け付けると発表した。その後、シンガポール学生2名から打診あった。後日、メールにて希望詳細を野々垣宛に送信するとのことだったが、1/19 時点にて未受領である。

5.AFEO への提言

特筆すべき事項なし

6.YEAFEO20(インドネシア)への提案

(1)中間会議の開催

AFEO から YEAFEO 中間会議の金銭的支援が受けられないため、費用のかからない Skype ミーティングが提案された。開催に関する詳細協議は Welcome ディナー中に実施することを決定がされた。日本は投票権がないものの関係性維持のため、協議への参加希望を表明した。代表者として野々垣が出席した（後述）。

7.その他

特筆すべき事項なし

12 時　昼食。派遣者、個人参加者間での情報交換。

14 時　YEAFEO 各国カントリーレポート

カンボジア／インドネシア／マレーシア／ミャンマー／フィリピン／

シンガポール／タイ／ベトナム／ブルネイ／香港／日本

各国の発表として、タイの大洪水、インドネシア・日本の津波などの影響もあり、Disaster Management といったキーワードが何度か出てきたのが印象的であった。

会議進行が遅れており、発表直前に発表時間を 10 分間にまとめるように議長より指示があった。竹内は、青年委員会の活動を中心に時間通りに発表を終えた。日本概要を紹介する資料のアニメ、AKB48 は認知度が高い模様で大きな反応があった。発表資料に関する他国からの質疑はなかった。なお、昆野の発案により日本が YEAFEO に対してどのような貢献ができるのかを探るため、各国の関心事および日本への期待について各国代表者に質問票を配布し、回収した。

※ラオス代表は欠席のため、未実施

16 時　YEAFEO 各国記念品交換。

19 時　Welcome ディナー

ディナー中、YEAFEO 各国代表者のみのテーブルにて YEAFEO 中間会議開催の協議。その結果、3/4(月)21 時（日本時間）に Skype ミーティング開催にて決定した。

2.3　12 月 18 日

8 時　会場入り。記念式典および基調講演他を聴講。

基調講演は、マレーシア技術士会長によるエネルギーと生活様態の変遷を紹介。

12 時　YEAFEO のみで昼食。各国参加者との意見交換。

14 時　CAFEO 各国カントリーレポート

-カンボジア／インドネシア／ラオス／マレーシア／ミャンマー／フィリピン／シンガポール

-タイ／ベトナム／ブルネイ

17 時　自由行動。派遣者はマレーシア・カンボジア参加者との意見交換。

2.4　12 月 19 日

8 時　会場入り。テクニカルツアー参加（カンボジアビール工場見学）

12 時　昼食。各国参加者との意見交換。出席者総数○○○名。

15 時　CAFEO30 クロージング参加。

19 時　Farewell パーティ参加。

日本からは、個人参加者による空手武芸および歌謡曲「ヤングマン」を振り付きで熱唱。

2.4　12 月 20 日

各自にて帰国

3. 考察

3.1 成果

3.1.1. 青年委員会における各国若手技術者団体との関係基盤の維持確保

カントリーレポート、中間会議協議、Farewell パーティ参加を通じ、日本の受け持分をこなし、代表団としての存在を明示できた。また前回派遣者（小川氏、千葉氏、葛西氏）を記憶している参加者がおり、関係が継続されていることを確認できた。今回派遣者全員も Facebook の YEAFEO グループに登録済みであり、容易にコミュニケーションができる環境を整備した。

3.1.2. 青年委員会国際活動の目指すべき方向性検討情報の収集

YEAFEO カントリーレポート時に各国代表者から回収したコメントからは、日本の高度経済基盤やインフラ、エネルギー、原発事故などに関心があることが伺える。また、直接交流を求める声もあり、活動の方向性検討のための情報を収集できた。

3.1.3. 派遣者・関係者及び国際活動に関心のある者への国際感覚の醸成

派遣者は、青年委員会の派遣目的を基軸に各人の目的を達成するために、調査・準備・会議参加を実施した。特に制約事項の多い現地において、努力・工夫し、目的を達成できたことは、かけがえのない経験である。
関係者及び国際活動に関心のある者（国際活動報告会参加者）への国際感覚の醸成については、派遣者自身の経験および各国代表者の回答等を用いて、1/19 国際交流発表会等を通じて、具体的な活動案のディスカッションを行うことにて実施したい。

3.2 所感・課題

3.2.1 日本代表団の参加形式について

各国参加者は非常にオープンマインドであり、ゲストである日本代表団を歓迎している。他国代表者は継続参加が多いが、日本派遣者は毎年変更となることについて、複数の代表者に問うたところ、全く問題ではないとのことであった。他国代表者も 3-5 年程度で世代交代を繰り返しており、引継ぎながら関係性を保っているとのことである。ASEAN 内でも欠席する国があることから、毎年継続的に参加している日本は、各国から好印象を得られている。

青年委員長が出席すべきかについては、ASEAN 諸国と日本の YEAFEO に対する意味づけが異なることから日本独自の判断でも問題にならないと推量する。

3.2.2 コミュニケーション能力について

日本代表団の英語力が不足していることについては、さほど気にはならないとのことであるが深い関係性を維持するため、さらに YEAFEO に積極的に貢献するためには、一定レベル以上の能力が必要であることは間違いない。この課題については、継続的に一定レベルの派遣者を確保するために青年委員会から会員に対して学習環境の提供および紹介が必要かと考える。
尚、言語能力の研鑽だけではなく、国際的なマナーや文化についても、学習または引継ぐべき事項として考える。他国に対する尊重のあり方や、タブーを知ることで、粗相を未然に防ぐことも、窓口たる青年委員会の役割と考える。

3.2.3 派遣補助について

各国の派遣補助については、数万円を参加者全員で按分している国がいくつか見受けられた。多数の参加者を派遣しているため、ほとんどの費用は個人負担となっている状況であるが、彼らはそれでもなお参加することに魅力を感じており、可能な限り、参加を継続したいとの意向であった。

3.2.4 来年度以降について

1/19 の国際交流発表会では、成果に対し、傍聴者らより期待の声が寄せられており、青年委員会による国際活動は十分に意義のあるものと評価できる。今回持ち帰った情報や成果は、青年委員会にて活用し、YEAFEO の他、香港との2国間交流などにも反映させ、活動の維持継続、活性化に貢献したい。

3.2.5 青年委員会以外の参加者・グループとの連携について

技術士会内部の他国際グループとも連携を取るべきとの意見が寄せられた。この点については以前より議論が進んでいたが、意見を受け、今後は情報共有をより密に行うことで、有意義な方向に進めていきたい。

また、YEAFEO への日本人参加者の拡大は、技術士会の内部に留まらず、早稲田大学の学生らも参加している。日本代表団として、彼らを含め、一括りで活動、発言する場合もあり得るので、連携、調整を今後の課題として検討したい。

4. 備考

4.1 会議参加以外の活動

- 9/6-21 派遣者募集への応募
- 9/30 青年委員会理事とのミーティング（今後の進め方）
- 10/ 8 Skype ミーティング1回目（役割分担）
- 10/15 個人参加者との事前ミーティング（会議情報収集）
- 11/25 Skype ミーティング2回目（事前準備進捗確認）
- 1/ 6 Skype ミーティング3回目（国際交流報告会準備）
- 1/19 国際交流報告会

・記念品等 購入
漢字入り色紙（夢・絆など各国に1枚づつ）
風呂敷（3色購入、参加者個人向け）
法被（睦・纏各1着、Farewell パーティ用衣装、保管し、来年も使用可）
・他国主要参加者への事前コンタクト
・連絡メーリングリスト（個人間メール含む） 170 通以上(10/5-1/19)

・会場外観1

・会場外観2

・Award Meeting Group 聴講

・YEAFEO 本会議

・YEAFEO 各国カントリーレポート（日本）

・Welcome ディナー

・YEAFEO 中間会議開催協議メンバー

・記念式典

CAFEO-30
Conference of ASEAN Federation
of Engineering Organizations

CAFEO-30
Conference of ASEAN Federation
of Engineering Organizations
Advantage of the Integration
of Engineering Services for Least Developed

•テクニカルツアー

・Farewell パーティ

2011-2013　青年技術士交流実行委員会　委員

2013年6月28日現在

	氏名	推薦元部会／地域本部	
委員(総括本部)	山地　真吾	機械	
	品田　義政	機械	会計
	片桐　勝広	電気電子	
	田中　雅人	電気電子	例会Gリーダー
	佐藤　理英	化学	
	山本　憲志	金属	ITGリーダー
	小澤　俊博	建設	
	中村　聡	建設	
	嶌田　泰彦	上下水道	副委員長
	横田　幸利	衛生工学	
	北條　健一	水産	
	武井　　遼	経営工学	委員長
	鈴木　史人	経営工学	
	石井　利教	情報工学	
	山中　淳至	原子力・放射線	副委員長
委員(地域本部)	田中　真也	北海道	
	堀内　深	東北	
	坂東　和郎	北陸	
	高瀬　春之	中部	
	高木　周一	中国	
	持田　拓児	九州	
委員補佐	渡邊　弘毅	建設	
	太田　道宏	情報工学	
	三留　規誉	生物工学	
	土井　一寿	生物工学	
	葛西　健司	機械	
	末廣　多恵子	化学	
	昆野　哲也	上下水道	
	藤井　佳直	情報工学	
	澤田石 朋彦	情報工学	
	松田　みゆき	繊維	
	村崎　諒	情報工学	
	野口　宏	建設・環境	
	細野　雄治	機械	